Introduction

はじめまして！　Musette Japan 代表の玉谷孝博です

日頃からFulltone Effectsを御愛用、またサポートしていただき大変有り難うございます。
より皆様にご満足して頂ける様これからも日夜努力してまいりますので今後とも宜しくお願いいたします。
私自身ギタリストなので良い楽器との巡り合いには毎回新しい感動がありますし、その楽器が自分をインスパイアしてくれることもたびたびあります。皆さまにはそんな感動を、そしてそれを手にしたことによりインスパイアされるような楽器をお届けしていきたいと思っております。
私の取り扱う商品は主にオールハンドメイドで職人の熱い情熱がそそぎ込まれた一品ばかりです。
その熱い情熱を感じ取っていただきたいと思うのと同時にあなたのプレイにリンクするようなまた精神安定剤のような存在で常にあなたの側であなたのプレイを支えられるような楽器でありたいと思っています。
From LAでは、そんな私の自己紹介のつもりで気のおもむくままに色々と書いて行こうと思っています。



音楽が好きで好きでたまらない方、ギター・サウンドが好きな方、楽器が大好きで気がついたら楽器に囲まれた生活を送っているという方、アメリカの音楽情報やLos Angelesに興味がある方、Luke & Landau命っという方、、、そんな皆様に楽しんでいただく事ができたらと思っています。

From LAを読んで、“久しぶりにあのCDを引っぱり出して聴いてみよう”とか、“夜だけど、アンプのスイッチ入れよっと！”とか、、“今夜はOctafuzz、Clyde Wah、Deja VibeでHendrix だっ”などと楽しい気持ちになれて、明日もまたがんばるぞ〜なんて思って頂けたら幸いです！

Here We Go !
May　2003

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

5月28日　Vintage Effectsとの衝撃的な出会い

魂を揺さぶられたFuzzサウンド

　1991年5月28日、マイケル・ランドウのバンド、Red Blues（Burning Waterの前身バンド）をハリウッドのChina Clubで観た時のショックは忘れられません（当時の音源を今聴いても凄い！）。暗闇の中で、あのTycobrahe-Octaviaのサウンドを聴いた時は“うわっ！なんだこれっ！？”という衝撃で、視線はもうマイケル・ランドウに釘付け！　加えて68年製50WのVintage Marshallのフルスタックだけでもインパクト充分でした(その日の貴重なラックの写真をご覧下さい。後ろにいるのはDavid Freedman)。そしてあのFuzzサウンド！　あの夜、僕は魂を揺さぶられました！……余談ですが、横ではマイケル・ランドウが当時付き合っていたWilson Phillipsのchynna（ソロ・アルバムに入っている同タイトル曲は要チェック^^）が、“マイコー！”って写真をバシバシ撮りながら大騒ぎしていたっけ^^。

Tycobrahe-Octaviaサウンドを探求

　ライブ終了後、会場の外ではマイケル・ランドウのローディが車に機材を運んでいました。僕はそのサウンドの秘密を知りたかったので、“このラックには何が入っているの！?”と聞いてみると、わざわざラックを開けて説明してくれたのです。そこにはBlueの箱のTycobrahe-Octavia、黒のFuzz Face、ハンドメイドのDemeter Tremulaterが……。

　その次の日からTycobrahe-Octaviaを必死に探し始めたのは言うまでもありません。そして、1年間で8台ゲット^^。その後はSRVが使用したこともあり、値段が高騰してしまいましたね。それ以来、1998年くらいまではマイケル・ランドウがライブをやるたびに、毎回テープ・レコーダーを片手に足を運んでいました（彼が歌うようになってから、プレイはちょっと雑になったかな……）。ちなみにその時のローディはDavid Freedman。その後、彼はBradshawから学んだスキルを生かしてローカルのミュージシャンのラック製作を始め、今ではアンプの製作までしています。

　丁度同じ頃、僕はマイク・フラーと出会いました。そして、彼がコピーしたTycobrahe-Octaviaは初期のOctafuzz となり、Deja Vibe、Fulldrive……そして遂にFulltone USAブランド確立へ、と話は続くのです。



BW Live at the China Club,Hollywood,Los Angeles.w/D,Freedman（5/28/91）



BW live at the Club Lingerie,Hollywood,Los Angeles.(7/16/91)

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

6月6日　マイク・フラーとの出会い　その１

　1992年頃、Hollywood -Guitar Centerまで歩いてワンブロック、というアパートに住んでいた僕は、その界隈に密集している楽器屋さんにほとんど毎日通い、ギターをヴィンテージ・アンプやエフェクターに通して弾き倒していました。
　そんなある日、僕はGuitar Centerの脇道にある「Voltage Guitar」という老舗ビンテージ・ギター・ショップの店先に、赤のスモール・ヘッドのVintage Marshall 50Wが飾られているのを発見します。“かっこいいっ！”と見ていると、お店のカウンターに座っていた人と目があったので、“これ、いくらっ！？”と聞いてみました。すると、そっけない声で“Fifteen Hundred Dollars”という返事が返ってきたので、僕は“Oh,Well”とかいって、その場は諦めて帰ったのです（因みにそのVintage MarshallはRATTのRobinが購入したそうです）。
　それからしばらくして、よく目を通していたローカルのリサイクル誌『Recycler』を読んでいると“Vintage Vox Wah for Sale”の文字が！　すぐさま電話し、その持ち主が指定した住所へと足を運んでみました。僕がその家のドアをノックすると、出てきた人はなんと例の楽器屋さんの店員で“君、Hollywoodのお店で会った事あるよね！”と気さくに家に招き入れてくれました。そこで目にしたのは、そこらじゅうに転がっているFuzz Face、VOX Wah,そしてEchoplexなどの多くのヴィンテージ・エフェクターでした。Fuzz FaceとVOXはバラしてあって、興味を抱いた僕はそのあと数時間、彼とギターを弾いたりJimi Hendrixを聴いたり、Vintage Effectsについて語ったりと、とても楽しい時間を過ごしました。
そう、その彼こそがマイク・フラー（Michael Fuller）だったのです。

6月19日　マイク・フラーとの出会い　その２

　マイク・フラーと出会った当時、彼はスタジオの仕事もしていましたが、それだけでは食べていけないので、楽器屋さんで週数回アルバイトをしていました。
　彼もHollywood GITに通う為にロスに引っ越してきたのですが、在学中に人の紹介で知り合ったLarry Carltonの家で、家の修理やペンキ塗りなどをして身の回りの仕事を手伝っていたそうです。ある日、自分の録音したテープを聴きながら壁にペンキを塗っていると、たまたまそこを通ったLarryが足を止めて“これ誰の曲！?”と聞いてきたので“僕の書いた曲だよ”と答えるとLarryはしばらく聴き入って“……あとでオフィスの方へ来てくれないか”と言い残していったそう。その後、当時ツアーをしていたLarryの奥さんのバンドでギターを弾くことになったそうです。

7月12日深夜　Fulltoneの誕生

Octafuzzの誕生

　'92年当時、ライブで観たランドウのOctaviaサウンドにやられていた僕は、『Little Gods』というメキシカン4人組のバンドとお付き合いがあったんですが、彼らのライブを観ていると、なんとそのギタリストも同じTycobrahe-Octaviaを使っていたのです。
　ある日、そのMannyというギタリスト（現Distortion Felix）が、バンドのツアーに高価なTycobrahe-Octaviaを持ち歩きたくない、と言うので、僕はマイク・フラーを紹介し、マイクにそのコピーの製作を依頼してみたのです。Mannyは出来上がってきた、正に手作りのエフェクターを気に入り、ツアーに持って行きました。また、僕はそのデッドコピーに感激し、日本に紹介したい、ということで8個だけ製作を依頼しました（因みに、そのシリアルは　0017〜0024です）。それが日本へ紹介した初めての8つのOctafuzzで、当時、僕がロスから送るVintage Effectsを販売していただいていた渋谷にある楽器屋さんで、委託品として店頭に並び始めました。それが1994年の3月の事です。

地道に繰り返した実験と製作

　その後、Uni VibeやVox Wah、そしてFuzz Faceなどをバラして研究を重ね、まずDeja Vibe（s/n-0004）が94年10月3日に出荷されます。それが日本に紹介された最初の1台です。まだまだ完成されていない未熟な物でしたが、マイクの情熱がそそぎ込まれたオールハンドメイドのこのDeja Vibeは、それはそれは素晴らしい物でした。Deja Vibeに関しては、テスト段階で試したその音はまだまだで、マイクに“あのUni Vibe の、地を這うようなハートビートが欲しい”と言うと、彼は怒った表情をしながらもうなずいたのを覚えています。そして、その次の日の早朝には、“TAKAっ！聴いてくれよ！”とマイクが電話してきました。電話の向こうで、やや興奮気味に、ギターをDeja Vibe Proto typeに通して弾く、彼の満足げなその音色を今でも思い出します。
　話は戻りますが、同時に並行して製作されていたUltimate Octaveも遂に完成し、94年10月11日に出荷されます。また、'69 Pedalも95年1月30日に初出荷されます。95年6月16日には、これらに続いたSoul BenderとFulldriveが1台ずつ出荷されますが、95年12月20日に出荷されたFulldrive 2の発表まで、少数生産ながら、いろいろな実験と製作を地道に繰り返していました。
　そして、96年に入ると3月にSupa Trem,4月に'70 Pedalをラインアップに加え、口コミでの愛用者がアメリカでも急増し、Fulltoneの名前は世界へ広まっていきました。 当時のギター雑誌の楽器店広告を探せば、その当時のモデルの写真が載っているはずです。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

7月6日　Doug Aldrichとの出会い　その1

ダグが見せた壮絶なプレイ

　渡米して間もない頃、カメラマンであるWilliam Hamesさんの、ハリウッドにある撮影スタジオでパーティーがあり、そこにお邪魔していた時にダグが一人でふらっと現れました。それが彼との最初の出会いです。お互いにギタリストという事もあり、すぐに意気投合して音楽の話に花を咲かせましたが、しばらくすると――その広い撮影スタジオの一角にバンド機材一式があったので――ナチュラルにジャムが始まりました。スタイルが似ているなと思いながらしばらくジャムっていると、ダグも盛り上がってきて、それはそれは壮絶なプレイを見せます。で、1曲終えると何事もなかったかのような穏やかな声で“Hey Let's play some more ,man”みたいな。そのギャップが面白いんです^^。

ダグとの付き合いの始まり

　初めて観たダグのプレイは、まさしく“その部屋に火がついたようなプレイ”という表現がぴったりのエモーショナルな物で、それはそれは素晴らしかったです。その後、ご縁があるのか、街などで偶然出会うことが多く、例えばSunsetのTower RecordsやMelroseの中古CD屋さんでばったり出会ったり（この時、昨日、日本ツアーから帰ったばかりでお金が出来たからCDを買いに来たって言ってたっけ）、Hollywoodの楽器屋さんでばったり会ったり。あと、North HollywoodのMatesというリハーサル・スタジオで音出ししている時、開けっ放しのドアの辺に人の気配を感じながらも弾いていたんですが、しばらくしても気配を感じるので振り返ってみたらダグがそこにいて“Hey Man, Taka, Sounds Great！”、“Thanks……”みたいな^^。“丁度、反対側の（といっても50メートルくらい先）スタジオでリハーサルしているんだけど、すげー音が聞こえてきたから思わず来ちゃったよ”だって。そんな大げさな……恐縮です　^^;

7月20日　Doug Aldrichとの出会い　その2

　そんな偶然が重なり、ダグとはいつしか一緒に遊ぶ事が多くなって、一緒にライブを見に行ったりお寿司を食べに行ったり、彼の家の庭にあるスタジオでギターを弾いたり、録音した音を聴いてみたり、今でもとてもいいお付き合いをしています。

　そうそう、昔、ダグがSteve LukatherやMichael Landau,そしてScott Hendersonを知らなかったのは意外でした。ある日、Scott Hendersonを観に連れ出したら唖然として“He is unbelievable！”と言ってましたよ。また、Jeff Beckフリークのダグは、毎週バーバンクのレストラン&バーで――ホントにDioに参加する前――しばらくの間友人達とJeff Beckのコピーバンドをやったり、Top 40とかダンスミュージックをやっていました。その様子を僕も数回観に行きましたが、ダグはダグ。ソロになるとあの調子で爆発していましたよ。ところで、Fulltoneの初期の時期に、ダグにマイクを紹介したら、ダグはFulltone Effectsをえらく気に入り、その後レコーディングやライブで愛用してくれていて、昨年のDioのアルバムでもFulltoneを使った、素晴らしいトーンを残しています。（ちなみに、現在はWhitesnakeの新作用にMac G4&プロ・トゥールスで曲を書いているようです。そちらもとても楽しみです！）



友人で元池部楽器渋谷店アンプ担当の上松剛氏とダグの家にて。

7月27日深夜　Dougが参加する新生Whitesnake

　今夜はUniversal Amphitheatre（Universal Studioの丘の上にある会場）に、新生Whitesnakeを観に行きます（因みにオープニングはSlaughter/Kip Winger/Warrant）。

　昨晩はLas Vegasでプレイしたそうで、さっき電話で話したダグは少々お疲れ気味でしたが“今晩、観に来てね。ゲストに名前入れておくから”と相変わらず気を使ってくれる、いつもの優しいダグでした。

　しかし、4ヶ月前にも同じ会場でダグの勇姿を観ていますが、あんなに生き生きと、そして素晴らしい演奏を披露しているダグは久しぶり。David Coverdaleも最高に乗っているし、今回のWhitesnakeは何回でも観たいと思わされます！以下はその時のライヴ・レポートです。

Whitesnakeライヴ・レポート

　観てきました、新生Whitesnake！　長くツアーをこなしてきたせいか、メンバーの息もぴったり！皆、とても楽しそうでした。2人のギタリストを擁するバンドで、しかもドラムがトミー・アルドリッチ。うるさくなりがちなのに、PAのバランスは素晴らしく分離しており、全てにおいて最高のショウでした。

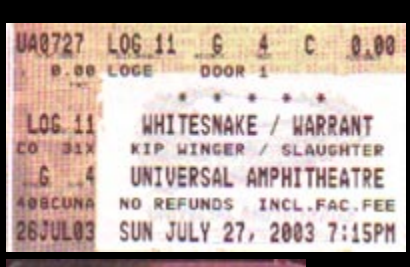
　ダグのプレイはお見事としか言いようがない！　一緒に行ったMark Cameron（Doug Aldrichのアンプを改造している人、Bognerで働いています）は興奮気味に、何度も“あれは俺のアンプだぜっ！”と僕に言います。“わかってるってっ！^^”

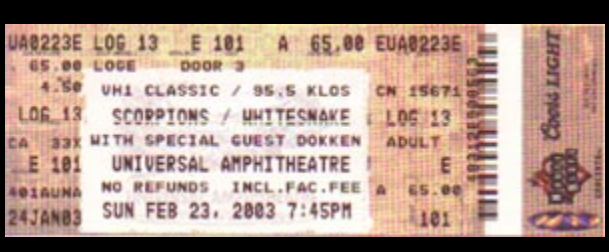
　とにかく、言葉では全て言い表せないくらい音抜け抜群の、艶のあるトーンは9月の日本公演でも話題になることでしょう。ズバ抜けてダントツ……脱帽です^^。

　さて、会場はというと、観客のおねーさま方はセクシーな服に身を包み腰クネクネ踊っているし、そこはアメリカ、皆ずーーっと大合唱！　Coverdaleも満足そうに観客にマイクを向ける事数十回。まるで古い友人がそこで歌っているかの様な錯覚に陥ってしまうほど、フレンドリーで紳士的な彼のステージに、思わずニヤけてしまったのは僕だけではないはず。「Is This Love」なんてやられた時にゃあ涙っすよっ！！　また、“何吸ってもいいけれど、今晩は最後まで一緒に楽しもうよっっ！”とか、“L.A.在住のDoug Aldrichを紹介します”など、MCでもお客さんを楽しませるツボを得ているのがたまりませんなっ^^。今回のショウは2日連続だったので、2日目の今晩は“昨日のショウではその辺からいい臭いがしていたけど、今日はどうだいっ！?いいの吸っているかいっ！？”って言うのも^^;アメリカならではだよね。今回のWhitesnakeは本当にお勧めです。出来れば見逃さないように！

音楽は『Love & Peace !』と再認識。元気を沢山もらいました。

今晩はいっぱいギターを弾こう……。





製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

8月1日　Dumbleとの出会い　その1

Dumbleの広告を紙面で発見

　1998年のある日の夕方、ローカルのリサイクル誌「リサイクラー」に目を走らせていたら『Dumble Modified Fender Bassman for Sale』というのがあり、興味を持ったので電話してみたら、とても紳士的な方が丁寧に説明してくれました。“とりあえず音を出してみたいので、いつ頃そちらへお伺いしていいですか”と聞いてみると“今からでもいいよ”というので、早速住所と名前、そして行き方を聞いてみました。名前は“アレキサンダー”……あれっ、もしかしてもしかするのかな！？　“あのうっ、もしかしてダンブルさんですか！?”、“Yes 、I am”。なんとあのDumble本人が広告を出して改造アンプを売っていたのだっ！　信じがたい話ですが実話で、しかも1週間前から広告を出していたのに電話してきたのは僕だけだったそう。

Dumbleのお屋敷

　教えられた住所を頼りに、ワクワクしながらフリーウェイを飛ばしてEagle Rockという、Hollywoodからだと車で北東へ20分くらいの山側の古い街へ。日が暮れかかっている時間帯になり、車をパーキングしてその住所だと思われる方向に目を凝らしていたら、近所の人が出てきました。“誰を捜しているの！?”と聞くので住所を伝えると“ああ、そこの家だよ”と指さしたその先には、錆び付いてボロボロの鉄格子のゲートと、その中の庭らしきスペース。そこは雑草やらでかい木やらで荒れ果てた光景で、その先をよく見ると石らしきの階段があり、上の方に古い3階建ての家がやっと目に入ってきます。するとその玄関先からダンブルらしき人影がのそっと登場！
電灯がないからか、手に持ったフラッシュライトで足下を確認しながら階段を降りてきてそのゲート越しに“はーゆーでゅーいん！?”
　以前にDumbleとおつき合いがあったMike Fullerからその風貌は聞いてはいましたが、それはそれは大柄な方でした。日本にはあのサイズの人はほとんどいませんね。しかも、どでかいジャーマン・シェパード2匹がうろうろしているわで、こっちはよりテンションが上がってきているのを押さえるのが必死でした^^;
　その犬に噛まれないかと心配しながら、案内されるまま階段を上がると、たどり着いた玄関のドアはこれまたボロボロ……そのドアを開けて案内されたのは、かなり古い時代の木造のお屋敷。そして、昔リビングに使われていたと思われる暖炉があるその広い部屋は、彼の作業場になっており、物が所狭しと密集していました。すぐ目に付いたのは無造作に置かれたブラックフェイスのFender Ampのメタルシャーシーの山！中身はからっぽです。



8月10日　Dumbleとの出会い　その2

作業場での試奏

　ダンブル・アンプの中身を御覧になったことのある方ならご存じでしょう。かなりVintage Fenderのパーツが使われているのです。そのパーツは、綺麗にラベル分けされた小さなパーツ用の引き出しに収納されており、しかも本棚を利用して、これが床から天井まで山積みだったのでびっくり！　しかもとても整理されていて、図書館の様に1つ1つが本棚の通路の様になっていました。ワーキングデスクの、彼が普段使っているであろうボロボロの椅子に案内されたので、そこに座りギターを取り出してその改造ベースマンを試してみること数分、彼が満足そうにニコニコしながら“どうだいっ！?”といいつつで一一んと横に仁王立ちしている。“It sounds Great”とかいいつつまた弾き続けているとしばらくして、“このアンプも聞いてみてくれ”とおもむろにジャックを抜き、ワーキングデスクの隅っこにあったアンプにプラグイン。聞くと、今製作している18ワットのアンプのプロトタイプだと。

終わりを知らない試奏

　またそれをしばらく弾いていると彼がのそのそと動きだしどこかへ行ってしまった。2階の方からガタガタと音が聞こえて、ミシミシと音をたてて上の階から降りてきた彼の手には、見たこともないアンプが……“これも弾いてみてくれよ”。完全に手作りのそのアンプも、クリーン・チャンネルのみの男らしーお姿^^。ブルージーに決めたのは言うまでも御座いません。ここぞとB B Kingしていたら、またまたニコニコしながらどこかへ。今度は部屋の奥の物置らしき所の中でガタガタゴトゴト……またもや手にはアンプを持っていて『これも鳴らしてみて』っと……(。。);
　結局、約4時間、夜中の11時過ぎまでDumble宅で拘束されてしまった^^

Dumbleの職人気質

　その改造Bassmanは僕が思っていた音とは違っていたので購入はしませんでしたが、彼のその紳士的な応対や、音への追求心には感銘を受けました。印象に残ったのは、“ビジネスには興味ない”というのと“Reihold Bognerは天才だ”と言った事。
　そうそう驚いたのは、当時偶然同じ週にDumble Overdrive Specialを購入する機会があったのでその事を告げると“そのシリアルは何！?”と聞くので言うと、そのオーナーの名前を即座に答えた事！
殆どのオーナーの名前はシリアルで即座に答えられると言っていました。
(当然、ファースト・オーナー、オーダーしてきた人の名前です)ちなみにそのアンプの現オーナーは元Judy and Maryというバンドの方と聞いています。
　ランドウ、スコヘンでさえも半永久的に待たされると言う Dumbleのお仕事。その完全無敵の職人気質に脱帽。

8月21日　Custom Ampのお話　その1

カスタム・アンプ製作の原点

　都内のお店で“おやっ、このBognerは見たことないタイプだなっ”って思った経験をしたことはありませんか！?　そうです、まさしくそれが改造アンプのラインの1つです。僕はこの10数年間に渡り、数々の改造マーシャルなどをL.A.から日本へ紹介してきましたが、この度Musette Japan設立に伴い、日本のギター・プレイヤー達の意見も取り入れつつ、より積極的に改造アンプ製作に力を注いでいこうと思っています。
　僕のカスタム・アンプ製作の原点は、1988年にMelroseにあったSoldanoと出会った事から始まります。当時、改造マーシャルを2台オーダーしてMike Soldanoにいくつかのリクエストをした所、素晴らしい物が出来上がってきて感動したのをよく覚えています。その後、お金をためてSLO100（Snake Skin Tolex）を購入しましたが、これもしばらくすると、数回Soldanoに改造のオーダーをしていました。なにか手を加えないと落ち着かない性格なのかも！?^^;（ボクは既製品には余り興味がないタイプ）。EL34を搭載したSLO100は素晴らしい音をしていましたが、ノイズの問題が解消されずにずいぶん悩んだ記憶があります。

Bognerのサウンドの幕開け

　ところで、L.A.のレコーディング・スタジオでは必ずと言っていいほど改造アンプが登場します。North Hollywoodにある機材レンタル専門店のAndy Brauer Rental Shopには10数台ある改造マーシャルの棚が備え付けられていて、そこから改造アンプが日々スタジオに届けられています。ちなみにReinhold Bognerは1989年にロスに改造マーシャルとボストンバック1つを持ってドイツから移住し、すぐに就いた職はAndyのショップでのリペアでした。そして、自分の改造マーシャルをレンタルした最初のクライアントが、当時デビュー・アルバムをレコーディングしにL.A.のスタジオにいたAlice In ChainのJerry Cantrellで、そのアルバム発表後のラジオでのオンエアーに伴い、Bognerの知名度はあっという間に広がって、当時のヘヴィ系のバンドはこぞってBognerにアンプをオーダーしてきたそう。なんというタイミング！　Alice In Chainの1stの1曲目の頭、これこそがBognerの極太歪みサウンドの幕開けでした！
　ちなみに、Reinhold Bognerがドイツから持参したという改造プレキシ・マーシャルはEddie Van Halenに売ったそうです。Eddieが自分で作ったギター1本とキャッシュで買ったんです。Reinholdにその話を聞いた僕は、当然興奮気味に“そのギターは今どこにあるの！?”って聞いたんですが、なんと“ネックとボディー、バラして売ちゃった！”だって！！！ Ohhhhhhhhh,Noooooooooooo !!



“ホワイト・ゴリラ”と名付けられた世界に1台のカスタムBogner Amp. 2000



#1　Cream Head Shellを違うアングルから。



Andy Brauerのショップのアンプの棚（1991年）



8月21日　Custom Ampのお話　その2

いつか再会してみたい改造Marshall

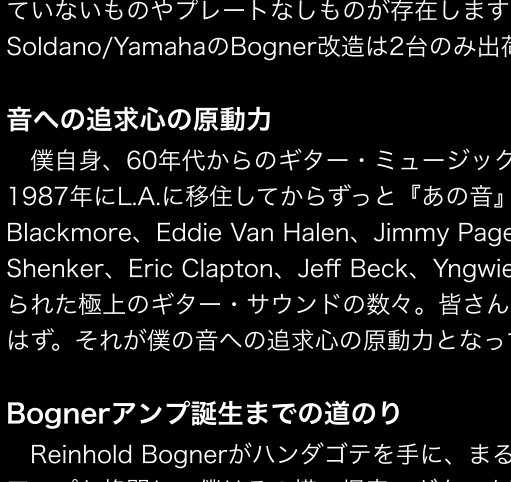
　今までBogner改造Marshallはシリアル#29まで製作してきたので、所有している方！　是非メールでご一報ください！（musette@pacificnet.net）背面に『Bogner Custom Amplification』というプレートがあり、アンプ内部にシリアルナンバー、『TAKA』と製作完了日付が手書きしてあります。(3台くらいは書いていないものやプレートなしものが存在しますが……）いつかまた再会してみたいです！
Soldano/YamahaのBogner改造は2台のみ出荷。ご兄弟で購入されたと聞いています。

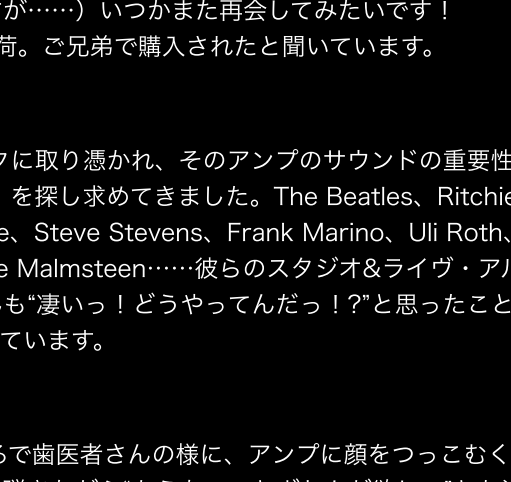
音への追求心の原動力

　僕自身、60年代からのギター・ミュージックに取り憑かれ、そのアンプのサウンドの重要性を実感し、1987年にL.A.に移住してからずっと『あの音』を探し求めてきました。The Beatles、Ritchie Blackmore、Eddie Van Halen、Jimmy Page、Steve Stevens、Frank Marino、Uli Roth、Michael Shenker、Eric Clapton、Jeff Beck、Yngwie Malmsteen……彼らのスタジオ&ライヴ・アルバムに収められた極上のギター・サウンドの数々。皆さんも“凄いっ！どうやってんだっ！?”と思ったことが一度はあるはず。それが僕の音への追求心の原動力となっています。

Bognerアンプ誕生までの道のり

　Reinhold Bognerがハンダゴテを手に、まるで歯医者さんの様に、アンプに顔をつっこむくらいの勢いでアンプと格闘し、僕はその横で爆音でギターを弾きながら“もうちょっとボトムが欲しい”とか注文を付けながらトーンを絞っていくという、愛と（^^）忍耐の作業を経てアンプは完成します。テスト期間も充分に1ヶ月はかけて出荷されます。これらの作業を通して生まれたアイディアを形にしたのがEcstasy -Classicであり、そして最強の極太歪みアンプ、Uberschallです。スペシャルでリクエストがあればCustom改造Ecstasyや改造Shivaも受け付けています。
話はいろいろそれましたが、また続きは書きますね！





今年の5月出荷の2台、“Brothers 2003”



Cream Head Shell、よく見るとアンプの後方にReinhold Bognerが！



製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

9月9日　改造マーシャルにまつわるお話

EVH

　やっぱり『改造マーシャル』というと、まずEddie Van Halenの登場が衝撃的でした。1978年の、衝撃のサウンドは色褪せていないどころか、今だにギタリスト達の憧れの音だと思います。ラジオで「You really got me」がかかると、ボリュームを上げて聴き入ってしまうのは僕だけではないでしょう。当時、インタビューで“Variacで電圧を上げて使っている”とか言っていたけれど、実際は「89」にセットしていたというのは80年代後半になって暴かれていました。

　そして、初期の頃から「Jose Arredondo」という人がEddieのアンプに手を加えていると言われていましたが、実際、アルバムやツアーパンフには必ずと言っていいほど「Special Thanks to Jose Arredondo」とクレジットされていました。

　Jose Arredondoといえば、僕は1987年にGITへ行くために移住してきた際、すぐに彼を探そうとしてみましたが、当時はまったくなす術がなく、結局Melroseに店を構えていたSoldanoに頻繁に出入りするようになって、いくつかアンプを改造してもらったという経緯があります。あと、当時ロスでは、Lee Jacksonもアンプ改造師として有名で、誰も彼もが彼にオーダーしていました。

Paul Gilbert

　話は変わって、GITの学期の初日のオリエンテーションでの事。
沼澤尚さん（当時PITの講師）とティム・ボガードがステージに上がったんですが、そこにひょろーーーっとした若いギタリストが、70年代と思われるとても古いマーシャルを手に持ち楽屋口からステージに出てきて、それをマーシャルの4X12の上におもむろにおきーの、電源コード差しーの、スピーカー・ケーブル差しーーの、スイッチとスタンバイを同時にばしっっとオンにしーの……見ていたら生音でバキバキとギターを弾いている様子。なんともさりげに……。俗にいうスケール練習での指のWarm Upかと思ったら……爆音になるにしたがってよく聴こえてくる壮絶な早弾きっ！（@@）;;（アンプが暖まってくるのと同時に音が少しずつ聞こえてくるあの感じ、わかるよね！?）インギーフリークが多く見られた当時の生徒達の目の色が変わったのは言うまでもなく、皆の目は釘付け！　そして、その3人のジャムはそれはそれは壮絶かつ圧倒的で、僕もはっきりいってたまげた！　アメリカはとんでもない国だとただただ思ったね。

　後日聞いてみたら、そのアンプはLee Jacksonが改造したもので、そのひょろーっとした若者は当時19歳になったばかりでGITを卒業して先生になったばかりのPaul Gilbertでした。

　その後、学校では11時から5時まで、ポールは部屋で生徒達とずーーっとジャムっていたから、僕も頻繁にテープレコーダー持参してその部屋に出入りしていたけれど、彼のギターに対する情熱にはただただ頭が下がる思いでした。だってずーーと弾いていたから！　よくLoudnessの曲を弾いていたのも印象的でした。昼は一日中生徒とジャムって、夜はRacer Xのライヴ、なんて日もしょっちゅうだったなあ。ちなみに、その部屋の幾つか隣りでは、Scott Henderson師匠が同じ様にオープン・カウンセリングというクラスをやっており、僕はこの2つのクラスに入り浸っていました^^

Scott Henderson

　Scott Hendersonといえば、僕が元々、六本木にあったANNという学校に通っていた当時、たまたまジャーニーのニールがギターを弾いているというのでJeff Berlinの初ソロ・アルバムを聴いていたら、その中の1曲で壮絶なソロを弾いている曲があって……（@@）！！　クレジットを見たらScott Hendersonだと……。調べてみたらHollywoodのGITで講師をしていることがわかり、ロス行き決定という流れになっていたのです！　^^;

Jose Arredondo

　いつも通り、話は大幅にそれましたが……。Jose Arredondo……出会う事なくこの世を去ってしまいましたが、その後、運良くJoseが改造したMarshallが突然売りに出され始めたのですが、僕はメシよりも優先に買い漁っていきました。今まで20台以上は手に入れて研究してきましたが、Bognerでその成果が発揮されています。

　そうそう、先日Chicagoに住む知り合いで、Joseの妹と話す機会があった方と話をしてたんですが、どうやら“Joseが残したノート”というものがあって、そこには“Eddie Van Halenは、1stアルバムではMXR-Distortion +を使用していた”という記述があったそうです！！　思わす緊迫してしまいました^^。

Variac（変圧器）




Jose改造マーシャル



マスター・ボリュームのノブがプル出来ます。その音は正にブラウンサウンド！



Arredondoの自筆サイン。



9月25日　L.A.での出会いにまつわるお話

EVHとBrian

　うちのすぐ近所のガスステーションでのこと、Bognerで働くSeanの友人のBrian（Singer）が給油していると、そこへ黒のメルセデスが来て、降りてきたのはなんとEddie Van Halen！　Brianは“Hey Ed！How are you doing !?”と声をかけた。Eddieは“（どこかで会った事あるのかなあ、、）Hi,Whatzup”と答えた。よくある光景……。でもBrianは続けた。“Hey ,What's up with your Band？Working on the new songs or what ?”Eddieは給油しながらシンガーがいないからインストを書いていると答えた。すかさずBrian、“俺 Singerでさっ、すぐそこに住んでいるからすぐCDを持ってくるよっ”と言ったら、Eddieはぬあんと『一緒にいくよ』とついてきた！（@@）;;

　本当についてきたEddie、アパートに入るとカウチに座りPlayBoy誌に目を通し、そこに会ったLes Paulを生音で弾きだし、彼が取り出した自分のCDに耳を傾けて“なかなかだよ。電話番号頂戴よ”って言って帰っていったそう。

　Brianのその後、この話を皆に言っても“嘘ぶっこいてんじゃねーよっ！”って相手にされず、Eddieが座ったカウチとギターには触れず、Eddieからの電話もこない……。面白い話として友人の間で広まっている^^

Toshiとの出会い

　1987年夏、GITへレジストレーションしに行った日に、一階のホールのステージでは眼鏡をかけてヒゲを生やした日系らしきギタリストがバンドでプレイしていて、僕はしばらくその彼のプレイに耳を傾けていました。その夜、偶然その日に声をかけてきた日本人が“高校時代の友人がいるから遊びに行こう”と誘ってくれたので、彼の車でNorth Hollywoodへ走ること約10分、ドアを開けるとそこには昼間ステージで見た彼がいて“Toshiです、よろしく〜っ”と。それ以来、Toshi（柳俊成）との交流が始まりました。

　Luke、Landau、Jeff Beck、EVH、Scott Henderson、Dan Huffなどの影響をモロに感じさせる彼のプレイは、まだサウンド面では未熟ながらも他の人にはない光る物を持っていました。

　その後、彼のフュージョン系インスト・バンドのライブに何回か足を運んでいましたが、お客さんは両手で数えられる程度。しかし、忍耐強く続けているうちに、対バンで知り合った“Cecilia Noel and the Wild Crams”というバンドに参加することになり、毎週月曜日にあの“The Baked Potato”にレギュラーで出演、毎週満員でそれはそれは素晴らしい演奏でL.A.の耳の肥えたお客さん達を大いに沸かせていました。（僕が一番大騒ぎしていたかも^^;）

　そのお客さんの中にはあのLukeも数回見られ“とぉぅし〜っっっ、いええ〜っ、ふぁあ〜くっめ〜んっ!!”と、その壮絶ソロ・プレイに大いに盛り上がって声援を送っていました。Luke、やっぱり素晴らしい人です！

　高中正義さんや小原レイさん、厚見玲衣さんなど、日本からのアーティストやレコード会社関係者がL.A.にいらしていた時にも、彼のライブでその姿を多数見かけました。

　4〜5年間毎週レギュラーで日本人が出演するというのは、後にも先にも彼だけでしょう。現在でも彼は不定期ですが“The Baked Potato”などでその溢れんばかりの才能を爆発させています！　L.A.に来る機会があったら是非足を運んでみてくださいね。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

10月18日　ダグアルドリッチによるFulltoneクリニック

　10月2日、池部楽器池袋店『OM Studio』にてWhitesnakeの一員として来日中のダグアルドリッチによるFulltoneクリニックが各方面の関係者の皆様のご協力の下、実現しました。この場をお借りして御礼申し上げます。
　さて、当日ラッキーにもご入場できた40名のファンの前に現れたダグは、連日のツアーの疲れなど微塵も感じさせないエネルギッシュなプレーを自作曲4曲で披露し、またFulltone Effectsを1機種ずつ弾いていきながら、予定演奏時間をはるかにオーバーしての熱い即興プレーを披露してくれました。普段ステージでは見る事の出来ない彼の暖かい人柄に触れる事が出来た上にプロの生音を身近で聴けるというまたとない貴重な時間を存分に楽しまれた事と思います。

　ホテルでも用意してきた新曲を熱心に練習する姿が目撃され、また、当日のリハーサルでも休むことなく何回もリハーサルを繰り返していたそうです。完璧主義者の彼らしい真面目な一面ですね。
　当日使用したアンプはダグが自宅スタジオでは勿論のこと、DioとWhitesnakeのワールドツアーでも使用された彼が長年愛用している『マークキャメロン』が改造した70年代のマーシャルと同仕様の物でFulltone製品との相性も完璧で素晴らしいトーンを弾きだしていました。エフェクターによってはプリゲインのボリュームを調節しながらデモ演奏をやっていたのが印象的でしたね。

ギターを歌わせることにかけてはダグは超一流でWhitesnakeの名曲『Crying in the Rain』でののびのびとしたプレーは本当に素晴らしくまさに jaw-dropping guitar sound*でした！（*口あんぐりだったという意味）





10月8日、武道館のステージに立ったダグアルドリッチの
足下にずっしりと置かれたエフェクトボード。
3人のギタリストの中でも一際目立つ抜けの良い素晴らしいのトーンを
弾きだしていたダグが長年に渡って愛用するフルトーン エフェクツ。
決して時代に流される事のない男のこだわりです。



ダグのエフェクトボード

今後のダグの活躍に期待っ！

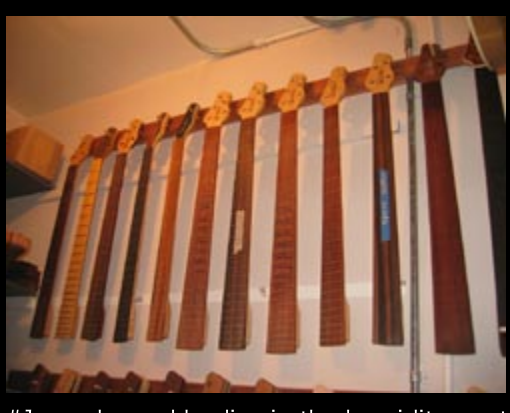
製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

11月18日　Rob Allen Guitars

　僕が日本へ紹介しているRob Allen Guitars (http://roballenguitars.com/)について書いてみます。
　数年前、Mike Fullerのバンドのベーシストのチャックがリハーサルに持ってきたRob Allen Bass MB-1というベースを見たマイクが『素晴らしいからチェックしなよ！』と電話してきました。また、学生時代にサンタバーバラでバンド活動をしていたMI Hollywoodで働くLA在住の日本人の先輩が以前からRob Allenという昔のバンド仲間が素晴らしいベースを製作しているから紹介するよっというプッシュがあり気になっていたので早速電話してみました。その電話越しに聞く彼はとても誠実そうでまた職人独特のProductsに対する頑固な姿勢やその情熱に感銘を受け早速2本製作オーダーを入れてみました。
　一ヶ月後に出来上がってきたそれらのベースは想像以上に素晴らしい物で今までのフレットレスベースのイメージを覆えさせられました。その木の感触といいトップ材の美しさは彼の拘りであり、その個性的なデザインそしてそのとても暖かいウッディーなサウンドは弾いた人の創造力を掻き立てる素晴らしい物です。
　今年の夏はVintage Guitar Magazine他音楽各誌で絶賛紹介され去年の約5倍以上のオーダーが入り非常に忙しく充実した日々を工房がある緑美しいサンタバーバラの街で過ごしているロブアレンの経歴をここで簡単にご紹介しておきます。

●1980-83　セイモアダンカン氏(Seymour Duncan)に約3年間師事。
　　(research and development of pickups + various tasks)
●1984-86　Performance Guitar-Hollywoodで働く。
●1986-87　Jim Tyler氏の元で働く。
●1986-92　LA Session Guitarist days
●1992-94　Melissa Etheridgeのワールドツアーギタリスト。
　* featured in Guitar Player Magazine Jan'93 regarding my guitar recording techniques
●1994-97　Rick Turner氏に師事。
●1997　サンタモニカにある"Guitar Traditions" で働きながらRob Allen Guitars オープン。
●2000, June　Santa Barbaraに Rob Allen Guitars の工房をオープン

現在、池部楽器店様と黒澤楽器店Bass Center様にて取り扱っております。
是非、足をお運びになってRob Allenの情熱に触れてみてください！



#1- necks and bodies in the humidity controlled drying room. This is a very important factor for wood stability.
We dry the wood to 6% moisture (very dry) before making the neck or body. Then it is kept in this room until it has the finish applied. This makes for the most stable instrument. Most large factories, and many small ones too, do not do this.


curly walnut. for Mouse body has "two tone" special wood- hard to find


top- wide curly Koa- you almost never see it with these very wide curls- it is usually smaller curls



Left- spalted Brazilian Rosewood- very, very rare. this wood is at least 50yrs old.
This will be sold for acoustic guitars. Brazilian Rosewood is the best acoustic tone wood in the world for guitars

Right- custom 8 string. 4 bass strings (fretless) and 4 nylon guitar strings (fretted).
the woods are: 9 piece koa neck, brazilian f.b for bass, goncalo alves for guitar.
Body is alder (extra deep 2.5 inches) with a curly koa top. Each set of strings will have it's own pickup and electronics for seperate amplification.
Each side will have it's own wooden volume knob on either side of the bridge.






製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

12月10日　The Baked Potato

　North Hollywoodのユニバーサルスタジオの丘のふもと界隈にあるThe Baked Potato(http://www.thebakedpotato.com/)では、LAの強者アーティスト達が毎晩思い存分楽しそうにプレイする姿を見ることが出来ます。
　TOTOのスティーブルカサーが1982年に『Baked Potato Super Live !』を発表して以来日本ではその存在がクローズアップされ観光バスが停まるほどの有名なライブクラブになりましたが、今だにツアーがない日はここで楽しそうにプレーするLA在住のトッププロ達を身近にその迫力の生音を体験する事が出来ます。

　先日、Pink、クリスティーアギレラのツアーギタリスト「Rafael Moreira」がローカルで活動しているフュージョン系のバンドのライブがありました。Bogner Shivaアンプを愛用する彼のプレーはクリスティーアギレラのワールドツアーで話題となりそのライブ映像がTVで紹介されるやいなやインターネット上で「クリスティーアギレラのギタリストは凄い。何者！?」っとちょっとした話題になっています。3ピースのバンドですがその圧倒的な演奏力でお客さんを楽しませていました。




Pink、クリスティーアギレラのギタリスト「Rafael Moreira」のローカルで活動しているフュージョン系バンド。
Bogner Shiva Ampの愛用者。

　The Baked Potatoで観た僕の最近注目のギタリストは「Jeff Kollman」。Cosmo Squad(ドラマーはB'zのツアードラマーのシェーン) というバンドで活動しておりThe Baked Potatoをホームグラウンドにたびたびライブをやっています。Bogner Amplification (http://www.bogneramplification.com/)のサイトのサウンドサンプルでもその個性的なプレーが聴けるので是非アクセスして聴いてみてください。
　また、「Chris Poland」も僕のお気に入りで彼はOHMというバンドで精力的にライブをやっています。初代メガデスのギタリストという肩書きがありますがそのプレーはずば抜けて素晴らしく楽曲もメロディアスな物から奇妙な物などまでバラエティーに富んでいて聴き手を飽きさせません。是非機会があったら聴いてみてください。
　クリスは長年に渡ってBogner Fish Preampの愛用者なのでたびたびBognerの工房で会いますが物腰の優しい素晴らしい人です。

　また、3月末にベイクドポテトで行われたベネフィットライブにルカサーとランドーが一晩中一緒のバンドでジャムる姿に遭遇しました。
　一緒にやるのは10数年ぶりっとルカサーが言っていましたがその彼らの楽しそうな事！ランドーの曲やHendrixまたJames Gangの曲を2人が楽しそうに弾きまくる姿は圧巻で、珍しくランドーがレスポールを弾いたりルカサーがフェンダーのストラトを弾いたりと非常に興味深い一夜になりました。おかしかったのは3セット目のルカサー師匠！呑みすぎてベロッベロッになりながらもステージに上がりギターと格闘するそのお姿！普通あそこまで泥酔したらステージに上がれないはずなのにそこはルカサー師匠、関係ないみたい。右手と左手が思うように動かない中ノイズを出しまくって『グッナィ、』っと言ってふらふらっと帰っていきました^^。 皆爆笑！　彼のお人柄なんだろうなあ。妙に関心させられちゃいました、さすがです！
　また一方でランドーのプレイはというとその音といいプレーといい絶品としかいいようがないです。本物の芸術です！　とても安定したプレーでお客さんを楽しませていました。

『魂』のプレーに脱帽！



左から、Bogner Home Page-サウンドサンプルで素晴らしいギタープレーを披露しているGreg V (http://www.bogneramplification.com/, http://www.gregv.us/)、彼はテキサスで「The Double Trouble」と10ヶ月間のツアーを経験したり、Buddy Milesと5年間のツアーを経験している素晴らしいギタリスト、今後注目です。Bognerのブレイン、Jorg Dorschner、彼も素晴らしいギタリストです（GIT出身)。今晩の主役でPink、そしてクリスティーアギレラのギタリスト「Rafael Moreira」。普段はLine 6でプログラミングの仕事をする傍ら、数々のツアーをこなしているJamie Kime。先日、マジソンスクエアーガーデンでのディキシーチックスの前座でのミッシェルブランチのバックでギターをこなしてきたそう。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

1月1日　あけましておめでとうございます

　気がつけば2004年に突入。
　今年も皆様にとって健康で素晴らしい1年でありますよう願っております。

　さて今回はいくつかライブのお話を。

　たまに足を運ぶ近所のアコースティックライブカフェでMark Goldenberg and Friends(Jackson Brownのギタリスト)を観てきました。マークは日本では80年代からコマーシャルソングなどの作者としても有名でファンも多いと聞いています。NAMM 2004でメーカーにもらったというバリトンギターを駆使して彼独特の世界を創造していてしばし圧倒されちゃいました♪　このカフェはKulakswoodshed (http://www.kulakswoodshed.com/about.shtml)と呼ばれアコースティックを中心にソングライターに活動の場を提供していて著名なミュージシャンもたびたびここを訪れてライブを行っています。またここはノーチャージで ($5くらいの寄付を求めている) 皆好き勝手に無造作に置いてある椅子やカウチやベッドなどに身体をあずけてライブを楽しむというなかなか洒落たスタイルのお店です。MTV-Unplugged を意識したのかそんな雰囲気です。インターネットライブ発信しているので是非ちぇけらっっしてみてください。

　次ぎに先日Chris PolandのNew Band 「OHM」をThe Baled Potato で観てきました。昔、LAのダウンタウンリハーサルスタジオで隣り合わせだったこともありよく知っているのですが相変わらずのスムースなフィンガリングで素晴らしいトーンを弾きだしていました。ライブ中、あまりの素晴らしいサウンドに『このファズとUni Vibeサウンドは何だろうっ』っと何度も思い休憩時に足下を確認してみたらDeja Vibeと'69 Pedal でありました ^^) 。アンプはBogner「Fish」Preamp、20スペースの巨大ラックエフェクツを使用していますがしかしそのトーンはクリーンでナチュラルな極上の物でした。「OHM」ではテクニカルに走りすぎている感もありますが彼が90年代初期頃からダウンタウンリハーサルスタジオなどでReel to Reelの4トラックなどに録音してきた音源が「Chasing the Sun」という CDで発表されているので是非聴いてみてください。僕の愛聴盤の内の一枚です。因みにライブの最後に演奏したクリームの「Politician」には度肝を抜かれちゃいました。クリスによると90年代後半にダウンタウンリハーサルスタジオである日この曲を一人で爆音で弾いている人がいて思わずそのリハーサルスタジオは知り合いの部屋だった事もありふと足を踏み入れて聴き入ってしまったそうです。プレーが終わって関心していると友人がそのギタリストを紹介してくれたそう。Chris Polandが知らなかったその人の名前はJake E Lee。あまりの素晴らしいプレーに感動しインスパイアされ、それ以来 クリスのレパートリーの一曲に加わってしまったそうです。

　さて、話変わって、LAには10年ほど前からトリビュートバンドブームでいろいろなバンドが登場してきましたが中でもVan HalenのトリビュートバンドのAtomic Punks (http://www.theatomicpunks.com/) は抜群です。特にボーカルのラルフの歌声はDave Lee Rothにそっくりっ！　またお客さんを楽しませるツボを心得ていてふと気がつくとどっぷり楽しんでいる自分に気づかされ1977年当時のVan Halenはこんな空気を発散させていたんだろうなっと思わずタイムスリップさせられてしまいます。

　また、The Beatlesのトリビュートバンドとして活動を続けているFab Four (http://www.thefabfour.net/) も機会があったら是非御覧になって頂きたいグループの1つです。The Beatlesの 初期～サージェントペパーズ期～後期と楽器は当然の事、衣装やズラも換えてお客さんを楽しませる事にかけて彼らのエンターテイメント性は非常に高いです。本家本元もライブでは演奏したことのないサージェントペパーズ期の音の再現にはもうノックアウト寸前！テープは一切使用していないとアナウンスされるくらいリアルで安定したその演奏力は驚きで彼らのビートルズに対する深いレスペクトをそのサウンドに感じることが出来ます。正にThe Beatlesファンには堪らない時間になることでしょう。彼らはラスベガスヒルトンホテルで定期的に出演しています。

　最後に、日本に帰国した際に東京ドームで見たPaul McCartneyと同じくらい感動させられた日本の誇るクイーンのトリビュートバンド、グイーン (http://www.gueen.com/) は超お勧めです。涙ありお笑いありの素晴らしいショウを機会があったら是非体験してみてください。クイーンファンなら思わず泣きながら一緒に合唱しちゃうはずです^^普段はプロとして多方面でご活躍中のメンバーが繰り広げるクイーントリビュート。
心温まる時間はいかがですか?

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

2月28日　NAMM Showの時期

NAMM 2004 のレポートは音楽関係各誌様にお任せしてと……　^^)

毎年1月に開催される楽器のコンベンション-Winter NAMM Showの時期には必ずLAのどこのクラブでもスペシャルなライブと出くわす機会があります。毎年これを楽しみにしている人達も少なくないはずです。僕もその内の一人でナムショウは早めに切り上げてディナーミーティングの流れであちこちに足を運んでいます。また、他の会場にいる友人達からの電話が入り何処に行こうかっとなる事もあります。今年もいくつか行きましたが印象深かった2つを御紹介します。

各メーカーが合同で開催していたアコースティックギターのライブ会場でライブを楽しんでいたら電話が鳴り、GibsonのパーティーにJohnny A が出演するとの事で速攻で Disney Downtown (Disneylandに隣接するレストランや映画館やクラブが並ぶエンターテイメントの為に作られたエリア) にあるライブクラブに行ってみました。そこは日本で言えば六本木Pit Inn程の小さな箱ですが80人くらいは入っていたでしょう。そこに登場したJohnny Aはさすがはライブを多々積んできている強者、堂々としたパフォーマンスで独特の空気を作り出していました。なんとよくみたらアンプ(Marshall Comboタイプ)からラインで音を拾ってPAから出していたのには驚かされました。珍しいですね。そして、Johnny Aの後に登場したのがなんとニールショーン！！　全くお変わりのないそのお姿に感動している暇もなくなんとジャーニーの曲を始めたのだ！　おかしかったのが、Separate Waysをやった時、まずボーカルのジェフスコットソートがキーボードを無難にこなしながら歌っていたんだけれども突然50歳くらいのおじさんが飛び入りして完璧にこの曲をノリノリで弾きこなし始めたからもう大変、会場大盛り上がり！　っでニールも大笑い！　偶然曲を知っていた全くのお客さんだったみたいです。いい歳したおじさんやおばさん達がキッズに戻って大合唱！　アメリカだな〜っっ^^最後は深夜までJohnnny Aなどをステージに上げての大ジャムセッションになったのでした。

そして、恒例のNAMM時期のThe Baked Potatoでのランドー師匠のライブ。9時半から始まるのに6時には列が出来始めて2セット共にSold Out！さすがです^^　ヨーロッパ方面から来ているファンで一杯でした。ちょうどランドーの真横1メートルの場所からみたのですが一緒に行ったGuitar's Stationの健太郎君は足下と手元とモロ生音を目の前で体験して口あんぐりっっ！(@@);　生々しいその素晴らしいサウンドには圧倒されっぱなしでした。

しかも！べろべっろのLukeが乱入！　よろけて健太郎君の座っている膝の上に座ってそのまま大騒ぎ！　っでしばらくしてトイレに行ったらげろんぱっっしてたし。　^^;

Lukeがランドーの前にある譜面台の下のスペースの床に座り込み……っで演奏の間があってAbe Jrに小さめの声でちゃめっけいっぱいで一言……『Abe！　ポールマッカートニーのツアーでいくら稼いだんだよっ！？(ニヤニヤしながら^^)』大先輩に軽くからかわれたAbe Jrの引きつった笑顔が印象的でした。大将っ、毎度の事ですが酔っぱらいすぎです。



ブラッドショーのスイッチングボード



当日の師匠の機材。アンプはダンブル。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

3月28日　Van Halen　再始動

Van Halenにサミ-ヘイガ-が復帰っ！
個人的にはやはりDavid Lee Rothに戻って来て欲しかったけれども、しかしサミーが参加して直ぐにVan Halen 初の全米#1になったアルバムがあったり実際サミーの方がVan Halenに在籍年数が長いし、またモントローズでの活躍もあってか、サミーのアメリカでの人気は絶大なるものがありますね。
1988年のMonster's Rockを思い出します。
スコーピオンズを前座に登場したVan Halenのそのサウンドにあっけに取られて口を開けっ放しだったような記憶があります^^
LAコロシアム(野外)でのあの音量、そしてあの素晴らしいギターサウンド、今まで見たライブの中でどれを取ってもダントツのロックショウでした。
夏のUSツアーが発表されたのでとても楽しみです。
1日も早くエディーの元気なお姿を拝見したいです。

3月某日　スティーブスティーブンス

憧れのアーティストが僕が関わっている楽器を手にしているのを見ることは最高の幸せです。
その中でも、スティーブスティーブンスの足下にFD2とFat Boost,そしてClyde Wahが置いてあるのを見たときは思わず身震いしてしまいました。
The Roxy でビリーアイドルとステージに立ったSecret Gigでの事。
スティーブスティーブンスはThe Roxyサイズ(オールスタンディングで400人程度)でもとんでも無い音量で弾くので初めは唖然とさせられましたが、しかしそのサウンドは絶品 ！素晴らしい！
昔 Atomic Playboys でのライブをThe Roxyで2セット観た時、なんとVIP席にはLA中の有名ギタリストが顔を揃えていて中でも一際目を引いていたのがエディー、ルーク、トレバーラビン。1つの同じテーブルにずらりとっ！
Vaiとビリーシーン、ウォーレンもいました。
スティーブスティーブンスがいかに皆に愛されているのかがわかりますね。
エディーとルークは終始大笑いしながらライブを楽しんでいたのがとても印象的でした。

3月某日　Fulltone - Tube Tape Echo

さて、遂にTTEの出荷がここアメリカで始まります。
妥協を一切許さないマイクフラーがテストにテストを重ね続けて当初の予定よりも数ヶ月遅れで遂に出荷が決定！
期待を裏切らない素晴らしい出来です！！
アメリカ国内では既に一般のユーザーからのバックオーダーが400台を越えているとのこと。
日本の店頭に並ぶには少し時間がかかりますがもうしばらくお待ちください！

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

4月12日　海外での音楽体験

　独り言なので読み流してください^^　（いつもかっ？＾＾；）
　僕がHollywood GIT（1987年）に行っていた事は既にご紹介しましたが、日本で音楽関係の学校に行って自分の腕を磨いてみたいとお考えの若い世代の方達に僕の経験から来る事を書いてみます。
　今でこそMI Japanなどがあって海外の音楽学校のカリキュラムを日本にいて実践できる素晴らしい環境がありますが、そこには日本では絶対に体験出来ない事が一つあります。それは、異国での世界中から集まってきている音楽家を目指す人達との貴重な交流です。この貴重な時間は僕の音楽観をひっくり返してしまった程刺激的で、日本で通っていた学校ではあり得なかった環境の中に自分を放り込んだ事によって得たものは計り知れないものでした。
　そこには世界中から集まってきているその街の腕自慢達がいるわけです。
　それはフレーズを速く弾けるとか誰それの曲を完璧に弾けるとかのレベルの話ではなく、生まれ育った環境から来るその国や出身地で培ったそれぞれの独特な空気感というかコード感、そのリズムやその間(ま)からくるオリジナリティー溢れるサウンドにはただただ圧倒されるばかり。
　実際にGITの先生より当時の生徒達から受けたその刺激やローカルで知り合ったミュージシャン達からの影響がいまだに僕の中でうごめいている程、相当影響を受けてきました。
　『個性』という意味では世の中にはとんでもないミュージシャンが大勢埋もれているという事ですね。
　若い時期に、１年間でも半年間でも３ヶ月間でもいいからその空気に触れに海外の学校または海外の音楽シーンに飛び込んでみてはいかがでしょう。そこでジャムったりして仲間とクリエイティブに音楽を楽しむ事が出来たら素晴らしいですよね。とても貴重な体験になる事でしょう。

レコーディングスタジオにて

　話変わって、80年代の後半から数年間、音楽関係のコーディネーターのお仕事をお手伝いしていた事もありLAのレコーディングスタジオに頻繁に出入りしていた時期がありました。
　日本から来る日本のアーティスト達をテイクケアーするのが仕事で日本のアーティスト達が招いたLAのスタジオミュージシャンの仕事を見るチャンスが多々あったのでそれはそれは毎回とても楽しみでした。
　その中でも、圧倒的だったのがランドーとティムピアスそしてポールジャクソンJrで、さすがっとしかいいようのない手際の良くまた素晴らしいその仕事ぶりは日本から来たアーティストは勿論の事スタッフ一同全員皆大満足で、僕的にも毎回とても勉強させていただきました。
　特にこの３人の中でポールジャクソンJrには圧倒されてしまいました。クリーンサウンドでのリズムワークで彼ほどその楽曲に合った素敵なプレーを短時間であれだけ表現する人は未だに見た事がないです。Just Fantastic !!!
　また、あのランドー師匠が音符を読むのが苦手というのも意外でした。難しいキメのフレーズがあってそれを休憩時間に一生懸命に練習していて、結局そのフレーズをキーボーディストに弾いてもらってそれをギターで音を拾ってしばらく練習してからレコーディングしている事もありました。またこの時のレコーディングはライブ録りだったのでその緊張感たるや…凄まじいエネルギーでした。因に、この時のメンバーはビニーカリウタ、ニールスチューベンハウス、マイケルランドウ。お昼過ぎに集合で音出しの一発目はなんと『You Really Got Me』(Van Halen バージョン)でした。
　因に、それらのレコーディングセッションの現場で観た中で一番魅力的だった日本のアーティストは間違いなく、長渕剛さん。ギターを弾くという事で多少ひいき気味かもしれませんが、全てが圧倒的に素晴らしかったです。弟子にしてください！^^　m(_ _)m

Tim Pierceの機材





製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

5月27日　Fulltone Tube Tape Echo

大変お待たせしております、遂にFulltone Tube Tape Echo が完成致しました。既に数ヶ月予定より発売が遅れておりその間に噂が噂を呼んでバックオーダーが500台を超えているのでショップはTTEの製作にかなり追われています。先日、その音を体験してきましたが正にマイク自身が語っているように想像以上の出来で、成る程マイクがわざわざダラスのギターショウにギターセンターがスポンサーでのTTEのデモンストレーションに2台持参で足を運んだ訳です。超力作っ！！

　その場に現れたJohnny Aが一発で気に入ってゲット、さらにロスに戻るとなんとLAでレコーディング中のブライアンセッツァーがTTEをフルでレコーディングに使用しているとの情報が入ってきました。

　日本へのリザーブ分からまず今回は2台のみゲットしそれが6月22日に入荷致しますので試奏されたい方は是非お楽しみに！

　また、お気軽にお問い合わせください。




TTE　とても魅力的な面構え、あのブライアンセッツアーが惚れ込んだそのサウンドはいかに!?



TTEを製作中

　また、Fender Custom Shopの企画でFender Custom Shop - Robin Trower modelのギターについてくるというFulltone Mini Deja Vibe - 『30th Anniversary Robin Trower “ Bridge of Sighs” Limited Edition』シグネチャーモデルが製作されていました。限定生産120台のみです。



　今回、フルトーンのショップの内部の写真をマイクの許可を頂いて撮ってきたのでいくつかご紹介致します。

●マイクのオフィスの棚にあるペダルコレクションのほんの一部。
（注…初期のFD、Deja Vibeなどが見える、オレンジのFD2はイアンムーアーとクリスデュアーの使用物）



●ワークベンチ … TTEの製作中



● Tsuguto w/Mike Fuller … つぐと君は大学を卒業後にFulltoneのドアーを自ら叩いて幸運にも採用されたチャレンジャー。現在、TTEの製作に追われる毎日を過ごしています。



● DP-1 … 人気機種、DP-1の組み込み中。



●ショップの内部　（注…皆それぞれヘッドホンをして黙々と作業をしている。ここでの無駄話は厳禁だっ）



●ショップから数分、右側はSanta Monica Beach



●Santa Monica ,カリフォルニアの燦々と輝く太陽と乾いた空気がFulltoneサウンドの秘密かも!?



　10人のスタッフが朝８時から夕方６時まで根気のいる細かい作業を全て徹底して手作りで仕上げていきます。最終サウンドチェックはマイクの耳だけが頼りで品質を守る為に１台１台マイクの手によって調整が入り、また厳しいテストを行った上で合格したものだけが出荷ラインに回されます。

　こうして世に送り出されて行くフルトーンエフェクターは世界中のユーザーの手元に乾いたLAの空気と共に運ばれていきます。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

6月14日　ベネフィットライブ

昨年の3/31/03にも行われたベネフィットライブが、6/12/04にまたLAのベイクドポテトで行われました。
「ARTSKAN benefit rallies musicians to support Kids With Autism Now,featuring Steve Lukather, Michael Landau and “a huge cast of special guests,”」と地元の新聞に告知された様にこの日のライブはボブブラッドショーの呼びかけでチャリティーの為に地元のミュージシャン達が集まって実現したという特別なギグでした。ブラッドショーの息子さんが自閉症を患っているそうなのですがその息子さんの通う学校等へ全額寄付されるそうです。
さて、ライブのレポートです。
前回は３セットもやりましたが、今回は8:30 &11pmの２セット、ストーレンフィッシュのカレンとランドウでしっとりと幕を開けたこの日のライブ、ストーレンフィッシュが数曲演奏した後、ルカサーがステージに紹介されるやいなやその箱の空気が変わるのがはっきりとわかる程ルークの存在は大きく、まさに親分って感じです。Jimmy Johnson(ベース)、Toss Panos(ドラムス)、Jeff Babko(キーボード)、ルカサー、ランドウがステージに揃っての１曲目は「I'm Buzzed」でそれぞれが今日の調子を確かめるかのような落ち着いたプレーで始まり、２曲目の「Up From The Skies」ではジャムが延々と続いてすでにヒートアップ全開。今までのルークは比較的エコーとディレイを多用したギターサウンドでしたがこの日はいつもの大きなラックを通っているにも関わらずドライに徹していてとてもヌケのよいクリアーなトーンでした。


Luke's rack

３曲目、２人が奏でる「Cause We`ve Ended As Lovers - 悲しみの恋人達」(Jeff Beck)は素晴らしすぎてただただ聴き入ってしまいました、絶品！！４曲目はファンキーなジャムがまた延々と繰り広げられ、５曲目は「Freedom」ルークが歌いランドウはズ太いUni Vibeサウンドでのヘビーなベンディングで揺さぶる揺さぶる！　いやぁ〜〜〜参ったっ！　それにしてもこのお２人、そのプレーもサウンドも本当にセンス抜群！思わず唸ってしまうっ！！　12歳の頃からの友達でお互いの手の内は知り尽くしているからかバランス抜群。凄いとしか表現のしようがありません。


ランドウのセットアップ

ファーストセットはルーク本人は満足していない様子でしたがセカンドセットではその反動でか爆発、 今まで以上の怒濤の弾きまくり！　その引き出しの多さにはただただ驚かされるばかり。次から次へと弾き出されていく歌心一杯のフレーズの数々、途中で「ちょっとトーンがこもってきたな…」なんて思っていた僕の気持ちを吹き飛ばしてしまったほどの壮絶なプレーで軽く持っていかれてしまいました。



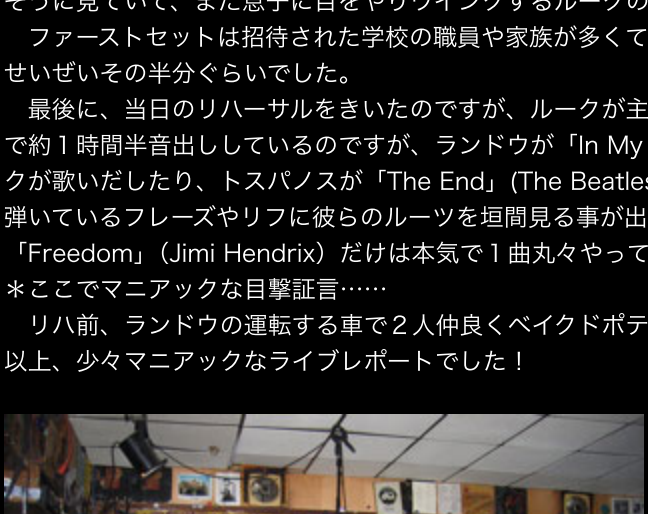
また、ランドウが表現豊かな素晴らしいプレーを披露すると両手を合わせて拝むような仕草を見せながら『The Best Guitar Player in the World, マイケルランドウ！』っと言って紹介しランドウの頬にキスをするルーク。彼らの深い友情関係に胸が熱くなってしまう僕はやっぱり彼らの大ファンです。
ルークの『What'zup !!』っという気合いの入った声で始まったセカンドセットは「I'm Buzzed」「Up From The Skies」「Roodis Tones」と続き、ここでゲストタイムに突入。スペシャルゲストと紹介されて登場したのはデビットペイチ(TOTO)、「Red House」ではその健在ぶりを存分にアピールしていました。



「Rascal Balls」を挟んで, この日ベイクドポテトの目と鼻の先にあるユニバーサルスタジオの敷地内のライブクラブ『B.B .King's』でのライブを終えてから駆けつけたというJimmy Z（ハーモニカ、サックス）が飛び入りしブルージーなハーモニカを披露し、次にルークと入れ替わったスライドの名手Chuck Kavoraasの年季の入った熟練のスライドプレーがバンドをひっぱり、次に登場したアダムというギタリストがスローブルースを始めたとたん、また空気が一転。



このアダムというギタリスト、ただ者ではない！ルークとランドウのプレーにひれ伏して萎縮してしまうような空気の中、実に堂々とした素晴らしいプレーを披露し喝采を浴びていました。バーにいたルークも立ち上がって乗りまくりで声援を送っていました。僕はこういうルークの純粋な所が大好きです！　そして僕がトイレに行った帰りに、ステージにいるランドウにビールを買ってわざわざ持って行ってあげるルークを目の前で目撃、とてもマメな人です。そんなルークに答える様に普段は見せない柔らかな笑顔でそのビールを受け取るランドウ。そしてビールを交わして『チァ〜〜〜ズッ！』素敵なお２人です。
そしてアダムとJimmy Zのサックスプレーを見ながら盛り上がっていたルークがなんとフラフラっとステージへ。何をするかと思ったら演奏中のドラマー（MAKOTO）に何か耳打ちしてスティックを取り上げてドラムを叩き出すではないですか!!　これには皆大喜びでまた最後までその曲を叩いたルークはご満悦でマイクを握り『Thanks for coming tonight.Good Night !』って、この日のライブは幕を閉じました。



ルークの息子（すでに18歳くらいであろうか？）がステージの目の前の床に座ってオヤジの勇姿を嬉しそうに見ていて、また息子に目をやりウインクするルークの姿をみたりでとても微笑ましかったです。
ファーストセットは招待された学校の職員や家族が多くてほぼ満員の120人強でしたがセカンドセットはせいぜいその半分ぐらいでした。
最後に、当日のリハーサルをきいたのですが、ルークが主導で断片的に各楽曲のパートの確認という感じで約１時間半音出ししているのですが、ランドウが「In My Life」(The Beatles）のイントロを弾くとルークが歌いだしたり、トスパノスが「The End」(The Beatles）のリンゴのソロを叩いていたり、さりげなく弾いているフレーズやリフに彼らのルーツを垣間見る事が出来たり、とても興味深いです。因に、「Freedom」（Jimi Hendrix）だけは本気で１曲丸々やっていました。
＊ここでマニアックな目撃証言……
リハ前、ランドウの運転する車で２人仲良くベイクドポテトに来ていました。
以上、少々マニアックなライブレポートでした！

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

7月20日　Bogner Custom Amp

　ここ半年以上の間、僕の企画でBognerによる新たな改造アンプの製作に取り組んできてやっと納得のいく1つの形が出来上がりました。
　ShivaというBognerのアメリカでの一番人気モデルをよりヌケの良いハイゲインサウンドにアップグレードしていままでの生産ラインのBognerサウンドにはなかった歪みを実現させる事に成功しました。
　素晴らしく適度にコンプレッションされたトーンでそのバウンス感もまるで良質の改造マーシャルそのもの、グっと沈む様なエグいLowも格別、80W EL34 x2本とは思えない音圧で弾く人を完全にあちらの世界へ導いてくれる事でしょう。
実は5月に日本に4週間ほど滞在してこの試作品#1を持っていくつか都内の販売店様を池部楽器商品部の方と一緒に半日廻る機会があったのですが各販売店の販売員の方々から『これは個人的に是非手に入れたいアンプですねー』っとの嬉しいお言葉を頂いてきました。頑張ってきた甲斐があった〜！　現在もうちょっと手を加えていて、8月末の最初の出荷分（10台）の完成、そして日本への出荷がとても楽しみです。
　エディーの初期のあの衝撃的なギターサウンド、Steve Stevensのあの圧倒的な歪みサウンド、サイクスのライブでのあの抜群な極太ギターサウンドなどお好きな方は間違いなくなんの戸惑いもなく弾きまくっていただけるでしょう。
　乞うご期待っ。

腱鞘炎。

　Bognerで爆音で音決めしている内に右手首に激痛を覚えてある日、腱鞘炎になってしまいました。ロックだぜっというアティチュードで毎日立って腰でギターを構えてヘビーなリフを連発していたら……「痛っって〜〜じゃん！」それがなんなのかわからず、そのまま日本へ行って数日後の朝に激痛で目が覚めて事の重大さに直面！　速攻で整形外科に行ったらなんとも涼しい顔をした先生が、『これは、典型的なドケルバン腱鞘炎ですね』
　いいから早く治してくれっ！（´O｀)トホホ、っつう一感じ。
　親指を中に入れて小指側に倒してみて痛かったらそれです……『ドケルバン（dequervain）腱鞘炎』！！_(゜o゜*)…φ(。_。*)痛くてギターなんて弾けません。当分は簡易ギブスしての生活です。
　右手使用不可。E-Bow買わなきゃ！　^^;
　皆さんはくれぐれも腱鞘炎にはお気をつけて！

B'z

　B'zの2003年のツアーにて大活躍したBogner - Uberschall とEcstasy Classic アンプですが、皆様はそのサウンドを体験しましたか？
　僕は、昨年の秋口にLAで行われたB'zのHouse of Blues (Hollywood)で2夜連続であの素晴らしいサウンドをラインホルドボグナーを連れて体験してきましたが、LAのライブハウスであんなでかい音量で弾くギタリストはSteve Stevensぶり！　Bogner Ampのサウンド自体がなんの濁りもなく前へガツーンと来るサウンドなので尚更ヌケているビッグなギターサウンドに圧倒され、Sold Outのこのショウは当然素晴らしいものでした。
　そうそう、気を良くしたラインホルドは、周りにドリンクをおごりまくっていました　^^。またその後、日本滞在時に埼玉スーパーアリーナでのライブも観ましたが、大きな会場ならではのリバーブ感がまたその音を美味しく引き立たせていてなんとも素晴らしいトーンでした。実際にBognerのみで聴けるバンドは有名どころでは、ジョージリンチ、Injected（チェックしていない方は是非騙されたと思って聴いてみてください。売れなかったのが信じられない程、抜群の楽曲とそのサウンドでしばらくどっぷりいけますよ)、そしてB'zだけなので、しかもB'zのそれは埼玉スーパーアリーナ！会場にもびっくりしましたがそのショウ自体も素晴らしく、この2つのアンプは元々僕のアイディアでデザインされたので感無量といった感じで観ていました。
　今年は松本さんと稲葉さんはそれぞれのソロ活動とのことですが、共にBogner Ampでツアーにもいくそうなのでとても嬉しいニュースです。
　各地のライブに足を運ぶ機会があったら是非その素晴らしいサウンドを体験してみてください。
　今後も新しいモデルをプロデュースしていくのでお楽しみにっ！！

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

8月4日 復活!!　#1

　夏です。暑いです。ボグナーのショップはオフィス以外はファンが回っているだけなので、サウンドチェックしているエリアはサウナ状態！ショップのあるLAのバレーは元々砂漠なのでその暑さと言ったらハンパでない！ 腱鞘炎、いまだに弾く角度によっては激痛が走りますが、気合いでギター弾いています！

　ラインホルドボグナーは僕の＃１のストラトヘッドの８１年製San Dimas Charvelのサウンドが大好きで必ず歪み系の音決めに持って来て欲しいとリクエストしますが、ショップで弾いている内に明らかにハイが出過ぎてきたので２人で気になっていました。

　ラインホルド曰く『リフィニッシュした際に元のフィニッシュの上に塗装を拭きかけているのではないか？』っと言う事でまさかとは思いましたが思い切って塗装を剥がしてみました。
するとなんとやはりその塗装の下には前の塗装が残っていました。しかも２種類も！リフィニッシュして大復活した僕のこの＃１は現在大活躍中で、また最近仲良く寝ています^^

話変わって、しばらくDoyle Bramhall II のCDにどっぷりの僕。
Arc Angels(1992)でAustin Texasから飛び出してきた才能溢れるアーティストですがエリッククラプトンのツアーに参加したりでその名前は世界的に知れ渡ってきましたね。
ドイルのWebに行くと彼のレアなデモも聴けるので是非チェックしてみてください。
ハマります！^^

今月の愛聴CD
1) The Beatles - Abbey Road (1969)
2) Doyle Bramhall II & Smokestack - Welcome (2001)
3) Wayne Krantz - Signals(1990)

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

9月16日 衝撃のライブ

なんというニュース！

『FREE SPIRIT 1979.7.14』Johnny,Louis & Char,
当日演奏された全16曲（未発表音源多数！）はもとより、MCなどテープに記録された音全てを完全収録！
しかも、当時のスタッフが資料用としてVHS（カメラ1台）に記録した当日の貴重なライヴ映像も出る！！
ヤバいっっ^^;　　生きていてよかった！

あの日、 日比谷野音にFree Spiritを観に行った僕はこのニュースによって元気倍増です。
このライブは僕のルーツの一つなのです。
新聞の告知を見て日比谷野外音楽堂に行ったら外に長い列が出来ていてその列に並んでゆっくり会場に向かって歩いていると突如演奏が始まった。
あのノイジーな君が代のメロディーが聴こえてきたのだ！！
ドキドキしながら会場にやっと足を踏み入れたのはいいけれど超満員でステージが見えない。
しかも、でかいアメリカの兵隊さん達が重なって立ってみているのでそこはまるで大きな壁！！
あっちへ行ったりこっちへ行ったり、、、
すると１人のでかい兵隊さんが背伸びして必死にステージを観ようとしている僕に気が付いてグワシっっと身体をつかんで持ち上げてくれてステージをみせてくれたんだよね。いい思い出。
結局、木に登って木の上から最後まで観ました。
忘れられない日本の夕暮れ時のあの空気が蘇ってきます！！

LAでの毎日はShiva Customのテストの繰り返し、そして３年前からラインホルドと取り組んで来たプリアンプの音決めであっという間に過ぎていきます。
Shiva Custom、発売予定の１０月末に間に合うかどうか、、。

今月の愛聴CD
1) Beck ,Bogert & Appice Live (1973)
- ベックのセンスに脱帽！
2) Frank Marino & Mahogany Rush - RealLive！ (2004)
- これはお勧め！地道にライブ活動を続けてきた百戦錬磨の実力！！
3) Jacques Stotzem - Clear Night (1990)
- アコギの可能性を堪能できます。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

10月28日 遂に完成”Shiva Custom Amp”

　TMG、そして稲葉さんソロツアー、ファンの皆様は足を運んで存分に楽しんで来た事と思います。
先日、ギターテクニシャンからアンプのライブレポートが来て、TMGのツアーではフューズが一回だけ飛んだそうですが、稲葉さんのソロツアーではあれだけ暑い野外公演も含め一回も壊れる事がなかったそうです。
ボグナーアンプの耐久性がここに証明されたわけです。
そのサウンドは足を運んだファンの皆様は体験したわけですがいかがでしたか？

Fulltone - Tube Tape Echoは遂に出荷台数450台を越えています。

日本国内でも好評で、１人で２台ご購入された方がいらっしゃるとも聞いています。
まだ、お試しになっていないプレーヤーの皆様、是非ご体験ください。
Brian Setzerのヨーロッパツアーでのステージの写真を アップしました。

遂に、完成！

Shiva Custom Amp,遂に出荷が決定しました。
是非、お試しください！






with Mark Cameron（10/28/04）

出荷が終わったら、１１月は日本に１ヶ月間滞在です。
なにか面白いライブがあったら教えてくださいね！

今月の愛聴CD
1) Deep Purple - Made in Europe(1974)
　- 最強のギターサウンド、僕の人生を変えてしまった一枚。
2) Jing Chi Live at the Blue Note Tokyo (2004)
　- 全てのセットの音源をゲット、毎セット違うインプロビゼーションを堪能。凄い！！
3) Van Halen Live (1976)
　- ブート。ラインレコーディングされたデビュー前のカバー曲オンリーのライブ音源。
　これは興味深い音源で、週末のダンスホールでカバーバンドをやっていた時代の物。
　Sweet Emotion, Rock n Roll All Night, Hots On For Nowhere（LedZeppelin）
　などをやっていてその演奏はやはりただ者ではないエネルギーに満ちています。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

11月28日 Bognerショップにて、

　Bognerの工房にはたびたびいろいろなギタリストが訪れますがその中で印象に残っているギタリストについて書いてみます。



出荷エリア

　ドアーを閉めた音出し部屋＃１（日本で言う６畳程度の部屋）の前である日思わず立ち止まって聴き入ってしまった時がありました。そこでアンプをチェックしていたのはクリスポーランド。
彼のタッチはスムースで何とも言えない独特の自分の世界を持っています。

同様に音出し部屋＃１での事。
音を聴いたら一発で誰かわかる、その音の持ち主はスコットヘンダーソン師匠。
Bognerの4x10のキャビを愛用していますが、この日はダンブルアンプを持ち込んでふらっと遊びにきていました。最近のライブは他の世界にいっちゃっていてすぐにお腹が一杯になってしまうのでついていけない自分がいますが、１人で弾くそのプレーはジャズとブルースが絶妙に溶け込んでいてやっぱり素晴らしいです。この個性は人間国宝級です！
　また、一番奥の右手にある出荷前の最終テストエリアにずらりと並べられたアンプの横で爆音で弾きまくるタンクトップを着た筋肉モリモリの異様にでかい人のプレーには圧倒！
巨匠ジョージリンチではないですか！　弾き倒すっという表現がピッタリ。
　もの凄く説得力のある入魂のプレーで聴く物を有無を言わさず自分の世界に引きずり込むパワーをもっています。


アンプテストエリア（Shiva Custom Amp のテスト完了)


出荷担当のショーンがアンプテスト中

最近で一番印象深かったのはJustin Derrico(The Calling)。
まだ２０歳くらいのギタリストであの表現力は素晴らしい！
BognerのHPでも彼のプレーをサウンドサンプルで聴けます。
LAに出て来て半年もしない内にツアーのオファーをゲット。
現在、The Caliingのツアーギタリストとして活躍中。
とてもいいヤツでした。

　番外編に、アンプを持って来てくれという事である日マリブの豪邸に呼ばれてBogner Ampの試作品等をスタッフと共に数台持って行きました。そこにレコーディングの為に滞在していたのはエリックゲイル。
Ecstasyのクリーンチャンネルであそこまで弾きこなす人を見た事がなかったので思わず笑ってしまいました！その引き出しの多さにはただただ脱帽！ただただ凄い！笑うしかない^^！
　リズムプレーといいリードプレーといい、ユニークな自分のスタイルをしっかり持っているもの凄いギタリストです。要チェック！
１０年前くらいに深夜のトークショウにゲストで出演していて録画してあったのですが何回観てもそのブルースをベースにしたセンス抜群のモダンなプレーは圧倒的に素晴らしいです。

News！
　つい先日あった情報ですが、ニューヨークのBognerディーラーがVan Halenのライブを観に行ってステージ裏で見た物はなんとスイッチランプがオンになっているUberschall。
　今回のツアーで使っているという信憑性の高い情報です！

今月の愛聴CD（日本滞在中スペシャル）^^
1) 平井堅 - 思いがかさなるその前に、、、(2004)
　- 　ただただ素晴らしい！
2) 東京事変 (2004)
　- 『群青日和』をTVで観て椎名林檎のデビューCDぶりのパワーを感じました。
　　ここのベースが大好き！　アメリカでツアーをやるべき、絶対にウケる！！
3) Johnny,Louis & Char ,Free Spirit 1979 07.14　(1979,2004)
　- 　いや〜、まいったっっ！　Char様、ありがとうっ！！

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

１２月２９日 良いお年を

約一ヶ月間の日本滞在を終えて無事帰国。１７台のShiva Custom Ampの第２弾出荷テストを終えて気分は一気に年末の大掃除モードです。

LAは１年を通じてあまり雨は降りませんがここ連日珍しく豪雨でそこら中で木が道に倒れて通行止めになっていたりフリーウェイではスリップ事故だらけだしNewsではFlood注意報が出ていたりで大変な事になっています。
傘を持っている人があまりいないっというのも車社会のLAらしく車から降りてくる人達は皆へっちゃらで雨に打たれながらお店に入って行く姿を目にします。

さて、Fulltoneから新製品の 歪み物エフェクター『Obsessive Compulsive Drive 』OCDが２月末に発売決定しました。このOCDは、ショップでマイクがOCDを通して嬉しそうにギターを弾く姿を見た限りではまた歪み系エフェクターに新しい風を吹かす可能性を秘めています、お楽しみに！

それでは良いお年を！！

今月の愛聴CD

１）The Derek Trucks Band - Soul Serenade （2003）
　　唸らせられます。
２）Nuno & Luke at the Blue Note Tokyo (2004)
- ライブ音源をゲット。やっぱりLuke主導ですね。
　LAでもローカルの小さなレストランでヌーノのフュージョンチックなライブを観ましたが、彼は純粋に音楽家なんだなーって思わされるそれを楽しむ姿に感動しました。

３）Norah Jones - Live at the House of Blues (2004)

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

1月23日 NAMM Show 2005

２０～２３日の期間、LAはアナハイムのコンベンションセンターで開催されたNAMM Show 2005に行って来ました。毎年盛大に行われるこのコンベンションは世界中から楽器に携わる人達が一同に集まるので音楽好きにはそれはそれはもの凄い空間です。

当然、著名ミュージシャンは普通にその辺にフラフラしているし、思考を凝らしたユニークな各ブースの数々、隣接するホテルのロビーでは夜中までライブをやっているし、各ホテルのホールでは必ずメーカーが主催するライブをやっているし、近所にあるHouse Of Bluesやレストランやバーでもどこかしらのメーカーが貸し切ってパーティーをやっているわ、街全体がお祭りムードの４日間でした。

Bognerのブースでは、人気機種のUbershallを中心にアンプがずらりと並び人がいない時間がないくらい試奏されていました。
ドロップチューニングでヘヴィーなリフを弾くギタリスト達（これが皆もの凄く巧い！）や、クリーンでジャジーに弾く人や、王道トムペティー系のリズムを絶妙なコードワークで弾く人などなど、この空間でギターを弾く人達のプレーを見ているとアメリカの奥深さに改めて驚かされます。
無名のハンパでないギタリスト達がゾロゾロいると言う事です。



Bogner Booth

ラインホルドから電話があって『３時にブースに来たら面白い事をやるから、、』っというのでブースに戻ったらBognerのショップの誰にも知らされていなかった新しいアンプの発表会が始まった！！
デモンストレーターを努めたギタリスト、Bognerファミリーの一員であるクリスティーアギレラのツアーギタリストのハファ（Rafael Moreira）が登場し度肝を抜くブッ飛びのプレーでこの新しいアンプの良さを充分に披露してそこに集まった人達を圧倒していました。



「360 °」and Rafael Moreira　、デモ演中。



しかも、このアンプはギターとペアで発表され（ギターのデザイナーはアンドレアギターズ）異次元的なムードをプンプンさせていて、それに負けるとも劣らないラインホルドとアンドレアはコスプレで登場したし！　しかもこれ、下はマッパです。横から見るとかなりキワドイっ。皆、信じられないっていう顔でまた大笑いしながらこの発表会は終了しました。しかし実はこれにはオチがあって、僕とマークキャメロンが心配していた事が現実に！　終わりかけた頃、ポリスが５人きて２人を連れ出して危うく逮捕されそうになったし。しかしそこはラインホルド。上手くかわして記念写真を撮って帰ってきました。公共猥褻罪ギリギリでしょ、横から見るとぶらり～んって透けているとはいえ見えているんだからっ！^^

360 ° Guitar by Andrea Guitar
(クリックすると大きな画像が見られます)



Andrea and Reinhold Bogner

さて、僕が好きなアコギのショウに今年も足を運んできました。『All Star Guitar Night』っといって、アナハイムヒルトンホテルのでかいボールルームで開催され、スタンディングが出る程満員でした。ここで個人的に気に入った新たな発見は「Monte Montgomery」というテキサスはオースティンのギタリストのプレー。一発でファンになりました。彼のタッチといいその表現力は聴き手のハートをガシっと掴んで離さない力強さと優しさに溢れています。
ホームページもあるので是非聴いてみてください。
あと「Kaki King」とこのショウのExecutive Producerでもある「Muriel Anderson」の２人の女性ギタリストのプレーも思わずどうやっているのか席から立って見てしまったほどユニークで素敵でした。「Muriel Anderson」が弾き語りでの替え歌で会場を湧かせた『上を向いて歩こう』のアコギ用アレンジもなかなかでした。ああいうヒネリと笑いのセンスはアメリカならでわ！

因に、Fulltoneはいままで一回もNAMM Showには参加していません。口コミだけで噂が広まりここまで世界中のプレイヤー達に愛され続けているフルトーンの実力って所ですかね^^

今月の愛聴CD

１）The Derek Trucks Band - Joyful Noise　（2002）
　The Allman Brothers Band のライブDVDでも素晴らしいスライドが聴けます。
２）Faith No More - The Real Thing (1989)
　このメンツ、凄いです。 文句なしのサウンド！
３）Ryuichi Sakamoto - / 04 (2004)
　自分をニュートラルにするにはピアノが一番。教授のセンスとタッチはBill Evans の次に大好物です！

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

2月28日 雨期のLAより

２月は連日豪雨が続いたLAです。家が裏庭の山崩れで崩壊したとかLA river（ターミネータでも登場していました）の凄い勢いの濁流とか洪水の為に道が遮断された道の数々とか、、、フリーウェイでは毎日の様に数台の事故車を目撃したし、普段殆ど雨が降らないLAはどこも大変な事態になっていました。
凄かったのは車のワイパー全開で４５マイル走行（普段は５５マイル制限、でも大抵は６０～７０マイルで皆走行している）なのに前がほとんど見えなかった事！そして車が隣の車線にズズズーーっと横滑りして壁にあわや激突しそうになった事！
ラッキーな事に空いている時間だったからか廻りには車がなかったので巻き込み事故にはならずホっとしました。 その後は４０マイルでの超ノロノロ運転で走行したし,,,,さすがにビビった夜でした^^;
深夜の落雷を伴った豪雨で打ち付けてくる雨の音がうるさくて寝れなかった日もありました。
まあでもこの時期を越えるともうすぐ夏なので待ち遠しい今日この頃でもあります！

話し変わって、ローカルのリサイクル誌にアンプのFor Saleの広告を出したときの話し。
このアンプはJCM2000でReinhold Bognerとある企画の試作品として改造した２台のうちの１台で（１台は既に日本行き）素晴らしいサウンドだったんだけれども改造費がかさみ（見積もり以上に時間がかかったので）送料等考慮したらLAで処分したほうが楽という事で売りに出したのでした。
って広告をみて電話してきた人と話しをしていたらなんとこの人僕がこのリサイクル誌でこの企画の為に中古のJCM2000を探していた一年前にこのアンプを売りに来た人だったし！
そう、このアンプの元オーナーがまた欲しくなって広告を見て電話してきたというなんとも不思議な出来事。JCM 2000は数台リサイクラーに広告が載っているのにです。
しかもこのアンプはボグナーの手に寄ってチューンナップされて超ご機嫌サウンドになっていたので速攻で気に入って買って行った事はいうまでもありません。

このリサイクル誌で知り合った元オジーのギタリストのジョーホームズといい、ある日メッセージを残してあったジョンサイクスといい、有名アーティストもチェックを入れているローカルリサイクル新聞。昔エディーもこのリサイクラーで自らいろいろ買い漁っていたという話しも聞きました。特に２０Wのオールドセレッションググリーンバックを買い漁っていたという事実を知った時エディーのあのサウンドの秘密を垣間みた気がしました。スピーカーのブレイクするその歪みも重要という訳です。

さて、Fulltoneから新しいオーバードライブの傑作「OCD」が発表されました。
今月号のUS Guitar Player 誌にも大絶賛のレビューが掲載され、毎日製作に追われているショップ内です。
３月２０日過ぎには日本にも上陸し、お近くの販売店に並ぶので是非お試しになってみてください。
歪みのエフェクターの歴史に新たな風を吹きこんでいく事でしょう。



また、店頭に出るや否や直ぐに売れてしまうほど大好評を頂いているLovepedalのCOT 50とEternityですがまだお試しになっていない方は是非一度この素晴らしい歪みを体験してみてください。
あなたのプレーに正に刺激を与える一品である事を保証致します！
新しく「Karl」っというファズも今回入荷しています。ファズとディストーションの中間って感じの独特な歪みを持ちそのとてもミュージカルなヌケの良いトーンはしばし弾きまくってしまう魅力があります。

今月の愛聴CD

１） Ted Hawkins- the next hundred years (1994)
よくVenice Beachでのストリートパフォーマンスを見たものです。ソウルフルっ！
２） Robert Randolph & The Family Band - Live at the Wetlands(2002)
ペダルスティールにハモンド、実においしい。
３） Lukeの名プレーのみを集めた自作 CD-r
ルカサーの初期（７０年代後半～８０年代初期））のスタジオセッションでのプレーはもの凄いです！トーンもプレーも絶品、歌いまくりのプレーは必聴です。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

3月29日 -Billy Idol/Steve Stevens

昨日の深夜、VH-1チャンネルでBilly Idolの新曲のプロモが流れてギター弾きながらTVを観ていた僕は思わず身を乗り出して見入ってしまいました。なんといっても１０数年ぶりのSteve Stevensとの
復活だしで。Billy 、相変わらず パンクだなー、、、そしてステージにあるアンプが写って僕のボルテージは一気に頂点にっ！

見た事があるアンプが、、、、Bogner- Uberschall があるっ！！

スティーブが1台(Purpleの Uberschall)レコーディングの為に購入したのは知っていましたが実際に
映像で観たのは初めてだったので思わず友人皆にメールしちゃいました。

この「Scream」という曲もゴキゲンだし、Keith Forseyのプロデュースも素晴らしく、ひさしぶりに買った
ヘヴィーローテで聴き込むCDとなりました。５／２４には深夜放送のトークショウで 「Scream」をライブ
演奏するそうだし、７月にはまたLAでライブあるし、しばらくはBilly Idol/Steve Stevensにヤラれっぱ
なしの日々が続きそうです。



今月の愛聴CD

１） Jimi Hendrix - Studio Out-Takes 1969-1970
　　- ただただヘッドフォンでジッと座って聴きいってしまいます。
２） King`s X - Gretchen Goes To Nebraska (1992)
　　- 当時,Mr Bigがツアーバスの中でヘヴィーローテでかけていたというKing`s Xの名盤。
３）Robert Plant - Manic Nirvana (1990)
　　- これ密かに好きです。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

4月22日 「2005楽器フェア」

お知らせです！
Musette Japan 初の楽器フェアへの参戦が決定致しました。
今回２回目の横浜みなとみらい「パシフィコ横浜 」にて１１／３～６に開催です。
前回参加しなかったESPさんも参加するそうで今回はより盛り上がりそうですね！
そして！　我がMusette Japanのブースには何が並ぶのかお楽しみですが、『おおおっ？！』と思ったら、そこです^^; 。『From LA 読んでまーす』の一言で抽選で１名様にプレゼントが、、、、、あったりしてっ（検討中です）。

ここでブースでの禁止事項発表ぉ～、パチパチパチぃ～^^/！

その＃１『もっと早く弾いてみてよ♪』とか言わない。
その＃２『歯で弾ける？』とか言わない。
その＃３『なんでタンクトップなんですか？』とか聞かない。

これ過去３回の楽器フェアー（池部楽器さんのブースで）で実際に聞かれた事です^^;
いやー、皆さんにお会い出来るのがとても楽しみです♪
現在、Bognerのプリアンプの製作を進めているので（去年の夏からやっています）楽器フェアで発表します。お楽しみに！

今月の愛聴CD

１）Michael Brecker - Tales from the Hudson (1996)
　　ギターはパットメセニー師匠です。
２）Billy Joel - Glass Houses (1980)
　　高校時代にサクラメントでホームステイした際,ホストファミリーがプレゼントしてくれたアルバム。
　　思い出深いです。
３）Rufus - Ask Rufus 1977

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

5月26日

日本に滞在中です。

都内にある某楽器店で T.O さんがBogner Shiva Customをかなり気に入ってご購入し
てくれたそうです♪また音楽誌 Jazz Life,Ad LibでBogner を発見。ジャズ系雑誌では初に違いない！
Shiva Customの赤のハーフスタックがドーーんっと写ってるし！ そのお方が TRIX の平井武士さん
というギタリストだという事を楽器屋さんの知り合いから聞き,早速ネット検索。って本人にメールしちゃ
いました。するとナイスな返信が後日ありツアーが始まるとの事で７／１７の目黒 BLUES ALLEY JA
PANへライブ を観に行ってきます。因みにお茶の水Big Bossでご購入してくれたそうです。
ここでその素敵な返信内容を少しご紹介しちゃいましょう。

『Bognerというとハードロックなイメージがあったのですが、クリーンチャンネルの音を聞いた瞬間、
　こいつはただものではないなと思いました。そしてドライブさせた瞬間に一目惚れ（笑）3秒で購入を
　決めました！！あれだけ透き通っていているのにゴリッと図太い部分もブレンドされている音は
　初めて耳にしました。普段はサポートギターリストの仕事をしているのですが、かなりいろいろな
　ジャンルに対応出来るなと思います。もちろんルックスもGood!!もともと赤好きでBognerの赤い
　キャビは結構前から使用してまして、上下赤のルックスはインパクト大です！！これからどんどん
　いろいろな現場で使用していきたいと思っています。』

こういう声を聞けると本当に嬉しいです♪『3秒で購入を決めました』というのが正に男らしいっ！！
わかる人にはすぐわかる極上のサウンドです。また渋谷の池部楽器店で聞いた話しによるとラルクの
ケンさんもシーバカスタムをご購入してくれたそう。早速,GIGSに登場したのでチェック。 あの写真で
メインのマーシャルの下に置いてある少しだけ見えている赤いアンプ（Shiva Customは 若干ヘッドの
サイズは小さめですが、これはマーシャルと同じ横幅のヘッド）はボグナー改造マーシャルです。
密かにスタジオに置いてありますねー。黒のShiva Customもしっかり紹介されていてとても嬉しいです。

初回３０台のみ出荷したShiva Custom Amp,その内聞いている限りでは８台もトッププロがご購入
して くれたのは嬉しい事実です。今後、出来るだけ多くのUserの声をWebでご紹介していきます。
因みにモニターだのビジネスだのというややっこしいのは無しです。感動の生の声のみをご紹介
致します。あと、Day After TomorrowのCDの内ジャケにBogner改造マーシャルアンプが２台写って
いるのを発見です♪

本日人生初の人間ドック参戦しに虎の門病院へ
結果は２週間後っ、、、祈っ！

　PS, Happy Birthday to my dear ♪

今月の愛聴CD

１）Robben Ford Talk To Your Daughter (1988)
２）Scorpions Live (1976)
　どこかの田舎町の小さなクラブで録られたUli Rothが在籍時のライブ音源。ウリ 壮絶っ！！
３）Day After Tomorrow -Faraway (2002)
　日本滞在時に偶然聴いた素敵な曲。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

6月12日 「B`z Live at Nagano M-Wave」

今回の日本滞在中に丁度B`zが長野でライブをやっていると聞き、長野 M-Waveへ足を運んで素晴らしいショウを楽しんできました。早めに長野入りし善光寺へお参りへ,そして信州ソバを食べてから会場へ。
センターステージでのライブなのでどこの席からもかなり近くでライブを楽しめる感じでした。ただセンター
ステージなのでアンプ類は一切ステージにはないのでちょっと寂しいかなーって思ったのは僕だけ？
やっぱりLed Zeppelinのステージみたいにそのギタリストの物と一目でわかるアンプの山とかがあるとライブ前ってワクワクじゃない？
大昔、武道館でリッチーブラックモアがやった時に 白いマーシャルの山を見ただけで心臓がドッキドキで、またギターテクがあの有名オープンリールテープデッキを ライブが始まる寸前にステージ脇から大切そうに持って来てセッティングしてスイッチランプがついたのを双眼鏡で目撃した時は 呼吸困難の一歩手前くらいまで
ボルテージが上がったのを覚えてるなー。そしてその直後にライブが始まったんだよね。感動っ！！
いままでで間違いなく一番最強のギターサウンドを体験した日だった。

またちょっと話しが逸れてしもた、、、m(_ _)m

ステージへはメンバー全員で会場を歩いての登場でファンは大喜びでしたねー。
サポートギタリストとのバランスも素晴らしく、松本さんのギタープレーも冴え渡っていたし、シェーンはもう最高だし、稲葉さんは国宝級の歌と存在感だし、、、、『今夜月の見える丘に』には思わず涙しちゃいました。
素晴らしい曲です！

ライブ終了後、しばらくして会場から出てみるとなんとシャトルバスへの長蛇の列が目に飛び込んで来てびっくり！
あの２時間のライブを立ちっぱで楽しんでいたファンの人達はまだパワーが残っているのかいっ !?
そんなのものともせずに列に並んでそれぞれライブの余韻に浸っているような充実した顔なわけ。
おじさん２人はとてもじゃないけど、、、バスはパス。同じくバスの列には並ばない組みがゾロゾロと歩いているので流れに任せてシータクでも探そうと歩いていると,このゾロゾロは近くに停めた車組みと判明。
おっけいっ！ならばどうせここでタクシーに乗っても道は渋滞している事だしって事でしばらく夜風の中をお散歩です。しかしさすがにここは長野県。しばらくすると寒くなって来たのでタクシーをマジで探し始めると
全てが「予約」ランプ付き。うぬぬっ、、、そうきたか、長のぉ～（稲葉さん風に）。

わかった、じゃあこっちにも考えがあるさ！セブンイレブンに人が溜まっている所に「予約」タクシーが続々と
滑り込んでいくのを見てこれはここに呼んでいるに違いないっと思いセブンイレブンへ。
そこに丁度お客さんを乗車させている運転手さんがいたので捕まえて「無線で１台呼んでもらえますか？」と
切にお願い。しかし営業所に電話して欲しいとの事。友人が携帯電話でもらった電話番号に電話してもずっと
話し中で寒い中１５分余り立ち往生。諦めかけた頃やっと電話が通じたのはいいけれど「100件以上の予約が
あるので何時になるかわからないけど、、」うぬぬっ、、、そうくるんだ、長のぉ～（＃２）

『（オレら善光寺でちゃんとお祈りしたはずなのに）ブツブツ、、、』っていうか、普通タクシーが何台も会場の外で
待っている光景があるはずだよねぇ？　どうなのぉ～？ こうなったら最後の手段、ヒッチハイクだ丁度目の前に
停まった車のドライバーに『ねえねえ、おにーさん、おにーさん！』っと最強満面の笑顔でアプローチ♪
『できたら長野駅まで乗せていってもらえませんか？ ウルトラソウルでっ♪』 快くOKしてくれた彼はなんと
静岡から３時間かけて来たと言う。 しかも先着１００名がゲットできるB｀zのサイン色紙の為に朝５時に来たん
だって！（整理券の番号は朝５時時点で既に６６番だったそう！） B`zのファンは実に熱いっ！こんなファンが
沢山いるわけだからアーティストも頑張れるんだね！坪井君本当にありがとうっ！！因に道中驚いた事に
長野駅までB`zグッズを手に歩いているファンの人達を車内から１０数組確認。あり得ないっ！
いやー、若いって素晴らしいっ ^^;

今月の愛聴CD

１）CRY OF LOVE - Brother(1993)
　　現在、Joe Perryのソロのバンドに参加しているAudley Freed、いいです。
２）IT BITES - Once Around The World (1988)
　　こいつは名盤！
３）Anita Baker - Rapture (1986)
　　『Sweet Love』は心を洗ってくれる名曲です。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

7月7日

「Whitesnake - Live at HOB 」

Whitesnakeの前回のツアーより規模が小さい箱での今回のツアー、先月６月２６日にLAはHouse Of Blues
で２連夜でのライブを観ました。とても５０代後半とは思えない日に焼け鍛え上げられた身体のカバーデールが
登場するや否やあのHousef Bluesの空気がガラっと変わってしまうほどの存在感。っであのお決まりの
オープニングのシャウト！　もう貫禄の一言！ あの歌声は国宝文化財ですね。カリフォルニアジャムの映像で
観たDeep Purpleでの勇姿とダブって、感動です！　しかも、前回のツアーではライブの寸前にかかっていた
Burnを、今回は一曲目としてライブでやっちゃうし。
昔はバリバリのヒッピーだったはずの白人のおっさんとおばさん達が大合唱で迎えてものすごい盛り上がり、
皆元気そうなカバーデールに再会できて嬉しくてしょうがない様子。カバーデールも同じみたいで、この夜の
ステージを楽しそうにエンジョイしているようでした。ダグはもう完全にカバーデールのお抱えギタリストになった
ようでその存在感は圧倒的で、またプレーもずば抜けて安定しているしで、今後カバーデールとの共作の
楽曲が生まれてくるのが楽しみです！

「Fender - Super Champ」

僕が渡米してすぐにローカルの新聞でみつけて中古で買った自宅練習用のアンプは、８０年代初期にポール
リベラがデザインしフェンダー社から数年間のみ発売された「Super Champ」というアンプでした。
いまだに愛用していますが、面白い事にいままでウチに遊びにきたギター好きの友人のほとんどがその
すばらしいトーンに驚いて速攻で購入しています。

僕がこのアンプに興味を持ったのは、昔の雑誌でルカサーがインタビューでこのアンプをスタジオで愛用して
いるという記事を読んでから。レコーディングした音を人に聴かせてみてだれもそれが１８Wの小さなアンプとは
信じなかったっという話。実際に使ってみるとわかりますが、小さなアンプなのでボトムは出ませんが卓の
EQで補充してあげると、、、なんと大音量で鳴らしているかの様なすばらしいチューブサウンドの出来上がり
僕の録った音源を人に聴かせてどうやって録音したのか聞かれて答えると誰も信じないけど、バスルームに
セットアップされたそのアンプを見たら皆驚きます。アンプを自分で買った事がないラインホルドボグナーも
ある日ウチに遊びに来て僕が弾いているのをみて次の日速攻で買ってたし。
先日、日本からマスタリングでLAに滞在していた友人がウチに遊びに来てこれまた驚いてたし。
ちなみに、たっかんの自宅にも（２０年ほど前）ウォーレンやジョージリンチの自宅にも、そしてダグの自宅にも
（ダグには１台譲りました。２台所有）このアンプを発見です！このアンプでギターを弾いているとギターサウンド
の「旨味」やチューブアンプのこうあるべきサウンドを理解できて 耳が肥えてきます。
間違いなく腕も上がります　d(-_-)b　！

日本のみで発売されたウッドの箱のモデルは当時ノーマルのモデルの倍の定価だったそう。因みに同じ時期に
でた「Concert」というアンプもSuper Champ同様ポールリベラのデザインですばらしいアンプです。
僕がボグナー社でヘッドアンプの開発作業時に主に参考にするのは、数台のホゼが改造したマーシャル、
そしてブラックフェイスのプロリバとこのスーパーチャンプです。
僕に取っては一生のお付き合いになるであろう究極の一品の一つです！



今月の愛聴CD

１）Prince - RAVE un2 the joy fantastic (1999)
　　この空気感が好き。
２）Albert King - King of the blues guitar (1989)
　　1966~68年録音の名作！
３）KIng`s X - Live all over the place (2004)
　　Ty Taborも大好物ですが、Jerry Gaskillのとても音楽的なタイコが大好きです。

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.

8月26日

「お知らせ＃１」

Bognerの輸入代理店を引き継ぐ事になりました。
各方面の皆様のおかげでここまでなんとか辿り着く事が出来ました。
そしてアンプテクニシャンの永田伴暁氏なしにはボグナーアンプは語れません！
ここにその皆様への感謝の気持ちを記しておこうと思います。
ありがとうございます！　m(_ _)m
そして今後ともよろしくお願い致します！

また、もちろんユーザーの皆様に対しましても感謝の気持ちで一杯です。m(_ _)m
皆様によりご満足していただけるよう今後もさらに力を入れて行きますのでよろしくお願い致します！

「お知らせ＃２」

遂にエクスタシークラッシックぶりにエクスタシーの改造に着手！
かねてからRed Channelに軽く手を加えたくてラインホルドにリクエスト＆説得してきましたが
今回やっと説得に成功。楽器フェアでの発表に合わせて作業を進めています。
もちろん、従来のエクスタシーのサウンドは申し分の無いもので世界中のトップアーティストをはじめ
愛用者は多方面に渡っていますが、よりアグレッシブなヘヴィネスさを求める現代の音楽シーンに対応すべき
と判断、オプションとして（エクスタシーカスタムとして）新しくラインアップに加わります。
現在、自宅とリハスタでテスト中ですでにその高いポテンシャルを確認し、周囲の耳を釘付けにしています。
ルックスも独自の物にし、赤ヘッド／ 白もしくはゴールドのフロントパネル（ノブのある部分）、ピラミッドはなし、
濃い赤ノブ、Gold Pipping になりそうです。
お楽しみに！

「お知らせ＃３」

Bognerをご愛用しているギタリストの皆様のコメントを随時アップしています。
いろいろなご意見をご紹介していきたいので皆様にも是非一筆お願いできたら幸いと思います。
ご意見は、 info@musette-japan.com まで。

「お知らせ＃４」

マイクフラーのNew Dog !!　このかわいい寝顔、、、やっぶぁいでしょ！！
さてこの子の名前はなんでしょう？　（ヒント *もう一匹の犬の名前はFender といいます)



今月の愛聴CD

１） Vicente Amigo -　Un momento en el sonido (2005)
　情熱のフラメンコギター！！　　これはお薦め！
２）Mr Children -　終わりなき旅
　大好きな僕の応援歌です♪
３）Albert Collins - Truckin` with (1969)
　若い世代のギタリストの皆さんにも是非聴いていただきたい一枚！

製品の外観、および仕様は予告なく変更する場合がございます。あらかじめ、御了承ください。
Copyrightc2003 Musette Japan, Inc. All rights reserved.